言はく「家は、近くあり。帖木眞には、有り無しには、心附かざりき。「家の」後より起くると來つ、我」と云へり。

宇兒帖等三女の虜はれ

彼の軍人ども、かくて驅け去れり。豁阿黑臣嫗は、その腰花牛を鞭打つと、疾く行かんとして、車の軸を折り去れり。軸を折られて、「徒にて林に走りて入らん」と云ひ合へる時、續きて彼の軍人ども、別勒古台の母を疊騎せしめ(尻馬に乘らせ)て、その二つの足を垂れさせて、驅けて到りて來ぬ。「この車の内に何を載せてあるか」と云へり。豁阿黑臣嫗言はく「毛を載せてあり」と云へり。彼の軍人の兄ども言はく「弟ども子ども下りて(馬より下りて)見よ」と云

不兒罕嶽の三繞り

三つの篋兒乞惕の〜返〜

へり。彼等の弟ども子ども下りて、戸ある車の戸を取れば、内に妃ら〜き人居て、その人を車より拖きて降して、豁阿黑臣と二女に疊騎せ〜めて率ゐると、帖木眞の後より草の蹈分に依り跡附けて不兒罕に上れり。

帖木眞の後より不兒罕嶽を三たび繞りて獲かれたり。這廂那廂に急ぎ廻れば、陷る泥通れぬ林あり、飽ける地(草木の繁れる處)に鑽り入れば、入られず〜て險〜く密く、その後より隨ひて獲かれたりき。彼等は、三つの篋兒乞惕なりき。兀都亦惕篋兒乞惕(親征錄)兀都夷蔑里乞)の脫黑脫阿(親征錄元史)脫脫)、兀注思篋兒乞惕の歹兒兀孫、合阿惕篋兒乞惕の

合阿台荅兒麻剌。この三つの箴兒乞惕は、前の訶額侖額客を赤列都（卷一の也客赤列都）より奪ひて取られきとて、今その怨を霽しに來つるなり。彼の箴兒乞惕言ひ合へらく「訶額侖の讎を報いんと、今彼の婦人どもを取れり。讎を報いたり、我等」と云ひ合ひて、不兒罕嶽より降りて己が家家に回りたり。

不兒罕嶽に救はれたる帖木眞の感謝

帖木眞は、彼の三つの箴兒乞惕、實に己が家家に回れりや伏したりやと、別勒古台、孛斡兒出、者勒箴三人を、箴兒乞惕の後より偵ひ、三たび宿り隨はせて、箴兒乞惕に離れさせて、帖木眞は、不兒罕の上より下りて、その胸を

椎ちて言はく「豁阿黑臣額客が、（嫗の大功ありし故に母と貴びたるなり。）䠷となりて聽きたる（涉那思）故に、銀鼠（元年）となりて見たる（元者）故に、本の身（不敦）を躲れんと、絆せる（不嗚元敦）（足繫ぎて轡なき）馬にて、鹿（不忽）の徑を徑りて、榆（不兒）の條の家を家作らんと、不兒罕の上に上りき、我。不兒罕（合孫）の御嶽に、蝨（孛額速）の如き命を匿（不勒只元勒荅）されたり、我。獨の命を惜（合赤）まんと、一つの馬にて、罕荅孫（獸の名）の徑を徑りて、柳（合勒合孫）の枝（喇）の家を家作らんと、御嶽（合勒敦）の上に上りき、我。御嶽（合勒敦）不兒罕に蟻（合兒察）の如き命を救はれたるぞ、我。甚く恐れさせられたり、我。不兒罕の御嶽を朝（馬納合兒）ごとに祭れ、日（馬里牙速孩）ごとに禱（幹赤）れ。我が子孫（元嗚渾）の子孫（元嗚黑）覺え（元合秃孩）居れ」（速該）とて、日を迎へて、帶を項

に掛けて、帽を手(左手)に持ち添へて、手(右手)に胸を椎ちて、日に[向ひ]九たび跪きて、灌奠(明譯將馬妳子灑奠)祈禱を捧げたり。

成吉思汗實錄卷の二終り。

王罕の救を求めに帖木眞等の合喇屯往き

成吉思汗實錄卷の三。

かく陳べて、帖木眞、合撒兒、別勒古台三人は、客咧亦惕の脫斡哩勒(親征錄脫憐、元史太祖紀、脫里、哈剌哈孫の傳、脫斡鄰)王罕の處に、土兀剌木哩(兀土河)の合喇屯(黑林)に居る處に往きて言はく「三つの箭兒乞惕に、意はず居る處に來て、妻子を虜へて取られたり。我が罕額赤格(罕なる父)、妻子を救ひて與へよとて來ぬ、我等」と云へり。その言の

王罕の返辭

返辭に、脫斡哩勒王罕言はく「我去年汝に言はざりしか。貂鼠の裘を我に持ち來つるに、「父の時に安荅と云ひ合ひたるは、父の如くあるぞ」とて被せられたれば、そこに我言はく「貂鼠(不登罕)の裘の返禮に、

散りたる汝の部衆を纏め合ひて與へん。黑き貂鼠の裘の返禮に、離れたる汝の部衆を集め合ひて與へん」とて、「腔子の胸に存れ。腰の尖に存れ」と云はざりしか、我。今彼の言に從はんと、貂鼠の裘の返禮に、都ての箭兒乞惕を滅すまで、汝の孛兒帖兀眞を救ひて與へん、我。黑き貂鼠の裘の返禮に、普き箭兒乞惕を打破りて、汝の妃孛兒帖を回らせて伴れ來なん、我等。汝は、札木合迭兀に（札木合なる弟。年少き故に、弟と云へり。）傳言して遣れ。札木合弟は、豁兒豁納黑主不兒（豁納黑河原、小河の河原）に居るぞ。我は、此處より二萬人にて右の手となり出馬せん。札木合弟は、二萬人となりて左の手となり出馬せよ。我等の約會（會合の場所時日）は、札木合より爲よ」と云へり。

札木合の救を求むる帖木眞の使

帖木眞、合撒兒、別勒古台三人は、脫斡哩勒罕より回りて家に到りて、帖木眞は、札木合の處に、合撒兒、別勒古台二人を遣り、「札木合安荅に言へ（帖木眞と札木合と幼き時安荅となれりし事は、後に委〜く見ゆ。）」とて、言ひて遣るには、「三つの箭兒乞惕に、來て座を空に爲されたり、我。（妃を奪はれたり。こゝの豁は、音ホにて、斡に通ず。）扣子（二物を結び合する紐釦の類）一つのもの（離れざる親友）ならずや、我等。讎をいかにか復さん。懷を半にせられたり、我。（こゝの含は、音ハンに下の句の哈と協ふ。）肝の親族（肺腑の親）ならずや、我等。怨をいかにか報いん、我等」と云ひて遣りぬ。札木

合安荅に言ひて遣りたる言、かくの如し。又客咧亦惕の脫斡哩勒罕の言へる言を札木合に言ひて遣るには、「前の日、我が也速該罕額赤格（也速該罕なる父）に助を好く爲されたるを想ひて、伴とならん、我。二萬人となりて右の手となり出馬せん。札木合弟に傳言して遣れ。札木合弟は、二萬人にて出馬せよ。相合ふ約會は、札木合弟より爲よ」と云へり。この言どもを盡させ畢へて、札木合言はく「帖木眞安荅を、座空になれり（斡囉　益黑脫兒忽）と知りて、我が心痛めり。懷半になれりと知りて、我が肝痛めり。（赫里格　額別惕　斡雪勒　斡咧　額別惕　額不兒　斡旋）離を復しに、兀都亦惕、兀注思篾兒乞惕を滅〜て、夫人孛兒帖を救はん。怨を（兀魯惕客　兀眞　哈赤）

札木合の返辭

報いに、普き合阿惕篾兒乞惕を打破りて、妃孛兒帖を回（合木黑　合勒塔赤　合屯）らせ救はん。今彼の鞍韉を拍つ時鼓の音となして遽て驚く脫黑脫阿は、不兀喇客額兒に居るぞ。（兀侖　戈勒篾　可兀兒格　迭克　不刺川。内府輿圖に、恰克圖の東に布拉喀倫あり。喀倫の南に布拉河あり、西に流れて色楞格河に入る。露西亞の地圖には、ブレン河とあり。不兀喇原は、この布拉河の邊の原野なるべし。）（不兀喇原、駱駝原。親征錄　谷卜赤）蓋ある箭筒を搖閃す時反り走る歹兒兀孫は、今斡兒桓薛涼格二河の「閒なる」塔勒渾阿喇勒に居るぞ。（谷兒巴勒札　歹只赤）

（斡兒桓河は、今の鄂爾坤河にして、唐書回鶻の傳に昆河また嗢昆水、元史太宗紀に斡兒寒河、明宗紀に斡耳罕水、虞集の句容郡王世績の碑に斡歇河、歐陽玄の偰氏家傳に斡爾汗河などあり。薛涼格河は、今の色楞格河にして、唐書回鶻の傳に仙娥河、元史巴而朮阿而忒的斤の傳に薛靈哥水、耶律鑄の雙溪醉隱集に錫蘭河、偰氏家傳に偰輦傑河、瀚海集に習靈靄河などあり。塔勒渾阿喇勒卽ち勇婦の島は、兩河合流の處にある出島なるべし。）蓬に風、戰ぐ時黑（含合兀勒孫　克　合喇）き林（桄）を爭ふ合阿台荅兒馬剌は、今合剌只客額兒に居る

ぞ。（合剌只原高寶銓の說に、今の哈拉河の下流の東北岸の地ならんと云へり。）今我等は、直に乞勒豁木哩（乞勒豁河、水道提綱の啓兒活河）を横ざるに、猪鬃草（撒合勒伯顏）は何處にも有れ、筏組み（撒勒忽牙）て入らん。彼の遽て驚く脫黑脫阿（額噶格）の天窓の上より入りて、彼の緊要なる帳房骨（額兒勒）を倒すべく衝きて、彼の妻子（額篤可溫）を盡くるまで虜へん。彼の福神（忽秃黑）の帳房骨（大黑柱と云ふが如き者）を折る（忽忽嗒）べく衝きて、彼の都て（撒脫剌）の部眾（撒幹孫）を空〜くなるまで虜へん。」

札木合（脫幹哩勒罕なる兄）又言はく「帖木眞安荅、脫斡哩勒罕阿合（脫幹哩勒罕なる兄）二人に言へ」とて言はく「我には、遠く見ゆる纛（合剌阿禿）を祭れり、我。黑き（合剌不合）强牛の皮にて張りたる（不哩克先）鼓（不兒乞哩）を打てり、我。黑き（合剌）快馬に乘れり、我。硬き（合唐忽）衣裳を被たり、我。鋼（合壇）

札木合が出陣の〜らせ約會の地

の鎗を執れり、我。挑皮（合惕忽剌速）ある箭を扣けたり、我。合阿惕（合惕忽勒敦）箙兒乞惕の處に戰ひに出馬（兀兒圖）せん便ちと言へ。長き遠く見ゆる纛を祭れり、我。牛の皮にて張りたる（幹惕刊）濁れる聲ある鼓を打てり、我。脊黑（忽客兒）の快馬に乘れり（兀訥）、我。革被（忽迭速禿）せたる鎧（忽牙克）を被たり、我。柄（汪吉）ある環刀（兀勒都）を執れり、我。扣子（幹那兒）ある箭を扣けたり、我。兀都亦惕（兀忽勒都牙）、兀洼思（幹那剌）蔑兒乞惕の處に死に合はん（死戰せん）便ちと言へ。脫斡哩勒罕兒出馬するには、不兒罕嶽の前より帖木眞安荅を過きて來て、斡難河の源に孛脫罕孛斡兒只に約會せん。此處より出馬するには、斡難河に泝り、一安荅の部眾此處に在り。一安荅の部眾より一萬人、我此處

王罕帖木眞の出陣

より一萬人、二萬人となりて、斡難河を泝り往きて、孛脫罕孛斡兒只に約會の地に會し合はん」と言ひて遣りぬ。

札木合の此の言を、合撒兒別勒古台二人來て、帖木眞に言ひて、脫斡哩勒罕に傳言を致せり。脫斡哩勒罕は、札木合の此の言を致さるゝと、二萬人にて出馬せり。「脫斡哩勒罕出馬するに、不兒罕嶽の前なる客魯涅の不兒吉岸を指して來ぬ」とて、帖木眞は、不兒吉岸に居たるに、「路（脫斡哩勒罕の路）の處にあり」とて、移りて統格黎克に（卷一の統格黎克小河と名同じけれども、彼は斡難の源に在り、是は客魯涅の源に在りて同ドからず、却て卷二の騰格里小河に同ドきに似たり。）泝り起ちて、塔納豁兒歡（塔納小河、內府輿圖の特納河、克魯倫河の上流に流れ入る小河）にて不兒罕嶽の前に下馬

王罕の後れたるを札木合の咎め

して、帖木眞は、そこより軍を起して、脫斡哩勒罕は一萬人、脫斡哩勒罕の弟札合敢不（親征錄元史）札阿紺孛）は一萬人、二萬人にて乞木兒合豁兒歡の（乞木兒合小河。豁兒歡は、豁囉罕に同ド。）阿亦勒合喇合納に下馬して居るに會ひ下馬せり。

帖木眞、脫斡哩勒罕、札合敢不三人一つになりて、そこより動きて斡難の源なる孛脫罕孛斡兒只に到りぬれば、札木合は約會の地に三日前に到りてけり。札木合は、この帖木眞、脫斡哩勒、札合敢不等の軍どもを見ると、札木合は、二萬の軍を整へて立ちけり。この又帖木眞、脫斡哩勒罕、札合敢不等も、その軍どもを整へて到り合ひ

て、さて認め合ひて、札木合言はく「風雪になるとも約束（孛蘭安 孛巻 孛勒札勒）には、雨になるとも聚會（忽剌 忽剌勒）には勿後れそと語り合はざりしか。我等忙豁勒には、者（諾する聲にて、我等のイと云ふに等しき辭）は誓したるに異ならんや。者より後れたる者は、班列（者兒格）より出さんと語り合ひき」と云へり。札木合の言につき、脫斡哩勒罕言はく「約會の地に三日後れて立てりとて、罰ふこと咎むることを札木合弟知れ」と云へり。約會の咎めは、かく言ひ合ひて、

三將の箙兒乞惕打破り

孛脫罕孛斡兒只より動きて、乞勒豁河に到りて筏組みて渡ると、不兀喇原に、脫黑脫阿別乞（別乞は、族長の稱）の天窓（額嚕格）の

上より緊要なる（額兒勒）帳房骨（額額迭）を倒すべく衝き入りて、彼の妻（額篤）子を盡くるまで（可兀 額出勒）虜へたり。彼の福神（忽秃黑）の帳房骨を折るべく衝きて、彼の都て（都脫剌）の部衆を絶ゆるまで（豁乞剌）虜へたり。脫黑脫阿別乞に、睡りて居る程に到るべきを、乞勒豁河に居る魚取、貂鼠取、野獸取、散りたる者ども、「敵來ぬ」とて夜通し走り報告を致し去りき。その報告を致さるゝと、脫黑脫阿、兀洼思箙兒乞惕の歹兒兀孫二人合ひて、薛涼格河に沿ひ巴兒忽眞（今の巴爾古精河の邊）に入り、僅にその身を走り遁れけり。

帖木眞孛兒帖の再會

箙兒乞惕の部衆、薛涼格河に沿ひ夜走りて行く時、我

が軍、走りて行く箋兒乞惕を夜又追掛けて虜へ掠め行く時、帖木眞は、走りて來る民に、「孛兒帖、孛兒帖」と喚びて行く時遇ひて、孛兒帖兀眞は、その走る民の中に居りき。帖木眞の聲を聽きて認めて、車より下りると走りて來て、孛兒帖兀眞、豁阿忽臣二女は、帖木眞の轡繩手綱を夜認めて執りけり。月明ありき。見れば、孛兒帖兀眞「なる」を認めて、抱き合ひに驅寄りたり。其處より帖木眞は、脫斡哩勒罕、札木合安荅二人に本夜便ち言ひて遣るに「尋ぬる所用を得たり、我。夜は勿夜徹しせそ。此處に下馬せん、我等」と云ひて遣りぬ。箋兒乞惕の部衆走りて來

孛兒帖を收めたる赤勒格兒の懺悔

るを、夜すがら散りて來る間に、その其處に下馬〜て宿れり。孛兒帖兀眞にかく遇ひ合ひて、箋兒乞惕の民より救ひたる緣故、かくあり。

初先に兀都亦惕箋兒乞惕の脫忽脫阿別乞、兀洼思箋兒乞惕の歹兒兀孫、「合阿惕箋兒乞惕の」合阿台荅兒馬剌、この三つの箋兒乞惕三百人は、日の前（の日）脫黑脫阿別乞の弟也客赤列都より也速該巴阿禿兒に訶額侖額客を奪ひて取られきとて、それに復〜報いんと往きけり。帖木眞を不兒罕嶽を三たび繞らせて、孛兒帖兀眞をそこに獲て、赤列都の弟赤勒格兒孛闊（赤勒格兒力士）に收容せ〜

めたりき。かく收容〳〵たるまゝに住みて、赤勒格兒孛闊反り走りて出づる時言はく「黑き老鴉（合喇克咧額）は、殘れる皮を食む命分ある者なるに、雁鵝（合老溫脫忽喇溫）を食まんと望みたりき。外貌惡き赤勒格兒、我。妃兀眞（合屯）に逼るとなりて、普き篾兒（合木黑）乞惕（合塔兒）に禍となれり、我。賤男（合喇除）なる惡き赤勒格兒は、黑き頭（合喇帖里）に「禍」至らるべくなれり。獨の命（合黑察罕）を逃れ、暗き隘處（合哩忽合卜察勒）に鑽り入らば、障蔽（合勒合）に誰にか爲らるゝことあらん、我。忽剌都（烏の名）なる惡き鳥は、鼠（忽答罕）小鼠を食む命分ある者なるに、天（渾）鶩鵝老を食まんと望みたりき。服裝（忽納兒）惡き赤勒格兒、我。福（忽秃）あり幸ある兀眞を收めて來るとなりて、都（撒脫剌）ての篾兒乞（黑）

惕（渾討兀）に禍となれり、我。豁乞兒（撒乞哩）（譯する能はず）惡き赤勒格兒は、涸れた（撒乞哩）る頭に「禍」至らるべくなれり、我。羊糞塊（撒兒撒孫）の如き命を逃れ、（撒嗚渾）黑く暗き隘處（合哩忽合卜察勒）に鑽り入らば、羊糞塊（撒兒撒孫）の如き我が命に院（撒哩）子と誰にか爲らるゝことあらん、我（院子は、明譯に從へり。院に匿まはる、意ならん。）」と云（牙安）ふと、反り逃げ去りき。

合阿台荅兒馬剌の廂はれ別勒古台の母の逃げ匿れ

合阿台（合塔孫）荅兒馬剌を獲たり。率ゐ來て、板（合塔孫）の枷を帶ばゝめて、御獄（合勒敦）不兒罕に向はゝめたり。「別勒古台の母、彼の隣にあり」と告げられて、別勒古台、その母を取りに往きて、彼の房に、別勒古台は、右の門より入れば、その母は、破衣（ヒツル）羊皮の衣にて左の門より出でけり。外なる他人

に言へらく「我が子どもは、合惕（罕の複稱）になれりと告げられたり、我。此處に惡き人に配ぎて、今子どもを面をいかで見ん、我」と云ひ、走りて密き林に鑽り入りき。かくて尋ねて得られざりき。別勒古台那顏（別勒古台官人）は、篾兒乞惕の只骨ある人（人と云ふ人）に「我が母を伴れ來よ」と云ひては、僕頭箭にて射殺すなりき。不兒罕嶽を圍み合ひたる三百の篾兒乞惕を子孫の子孫に至るまで灰を吹拂ふが如く滅せり。殘れる彼等の妻子は、抱くべき者どもをば抱けり。門に入らしめらるべき者どもをば門に入らしめたり（明譯）他的其餘妻子毎、可以做妻的做了妻、做奴婢的

篾兒乞惕の勦滅

218920

王罕札木合に帖木眞の感謝

做了奴婢。）

脫斡哩勒罕、札木合二人を帖木眞感謝みて言はく「我が罕額赤格、札木合安荅二人に伴と爲られて、皇天后土に力を添へられて、稜威（額兒客）ある皇天に名のりて。母（額客）なる土（額秃）地に到らしめて、（天を父とし、地を母とする故に、敵の國土をも母と云へり。到らしむは、到らしめらるの意なるべし。）男（額唎堅）の怨ある篾兒乞惕の民を、彼等の懷（額不兒）も空になしたり。彼等の肝（赫里格）も半（含帖勒）にしたり、我等。彼等の位（幹嘛）も空（豁黑脫兒灰）になしたり。親族（兀嚕渾）の人をも失（兀魯惕格）はしめたり、我等。彼等の殘（許列克薛惕）れる者どもをも掠めたるぞ、我等。篾兒乞惕の民をかく壞りて退かん」と云ひ合へり。

敵營に遺れる幼兒曲出

兀都亦惕篾兒乞惕逃ぐる時、貂鼠の帽ある、牝鹿の蹄皮の靴ある、粉皮と水の貂鼠と接ぎたる衣ある、五歲なる、曲出の名ある、その目に火ある幼兒を、我等の軍人どもは、營盤の內に遺りたるを得て、伴れ來て訶額侖額客に給事に率て與へて去れり。

三將の引上げ

帖木眞脫斡哩勒罕、札木合三人一つになりて、篾兒乞惕の奧向の房を推倒〜て、和合せる婦人を掠めて、斡兒罕（綽兒罕）（卽ち前の斡兒桓河）薛涼格二河の塔勒渾阿喇勒より退くに、帖木眞、札木合二人は、一つとなりて、豁兒豁納黑河原を指〜て退けり。脫斡哩勒罕退くには、不兒罕嶽の背より訶闊兒

帖木眞札木合幼き時二たびの安荅

禿主兒不を過ぎ、（兒不の二字倒置せるに似たり。）合察兀喇禿速卜赤惕、忽里牙禿速卜赤惕を過ぎ、その野獸を圍獵〜て、土兀剌の黑林を指〜退きたり。

帖木眞、札木合二人は、豁兒豁納忽河原に會ひ下馬〜て、曩の安荅と爲り合へるを想ひ合ひて、「安荅を爲直〜合ひて親み合はん」と云ひ合へり。最前に安荅と爲り合へるには、帖木眞十一歲なる時、札木合は、麀の（麀の骨にて作れる）髀石を帖木眞に與へて、帖木眞の銅灌の（銅灌の如き）髀石と換へ合ひて、安荅に爲り合ひて、安荅と云ひ合ひたるは、斡難の冰の上に髀石を打つ時、其處に安荅と云ひ合ひた

りき。（阮葵生の蒙古吉林土風記に曰く「羅丹、鹿蹄腕骨也。舊俗、以蹄腕骨隨手擲擲爲戲、視其偃仰横側爲勝負、小者以麋、大者以鹿、瑩澤如玉。兒童婦女、圍坐擲擲以相樂、以薄圓擊之、則曰怕格。又有較遠之戲、趨冰上、以中爲勝、名曰撒罕」と云へり。撒罕は、骨なる蒙語撒合の轉なり。帖木眞札木合の、冰の上にて髀石を打てるは、いはゆる較遠の戲れなるべし。）その後の春、木作の弓にて箭を射合ひて居る時、札木合は、二歳牛の二つの角を粘けて孔あけて聲ある響鏑頭（鳴鏑）を帖木眞に與へて、帖木眞の柏の頭ある鏑矢と換へ合ひて、安荅に爲り合へり。二たび安荅と云ひ合ひたる緣故、かくあり。

三たび安荅の盟

曩に老人だちの言を聞きて「安荅の人は、命（阿民）一つにて棄て合はず、命（阿民）の護（阿吨赤）となるなり」とて、親み合へる緣故、かくあり。今又安荅を爲直〜て親まんと云ひ合ひて、

帖木眞は、篾兒乞惕の脫黑脫阿を掠めて取れる黃金の帶を札木合安荅に繫けさせたり。脫黑脫阿の久〜く交尾せざる鼠黑き馬に札木合安荅を乘らせたり。札木合は、兀洼思篾兒乞惕の歹兒兀孫を掠めて取れる黃金の帶を帖木眞安荅に繫けさせたり。又歹兒兀孫の角ある子羊の如き白馬に帖木眞を乘らせたり。豁兒豁納黑河原の忽勒荅合兒の崖の前に繫れる木［の下］（忽圖剌合罕の卽位したる處）に安荅と云ひ合ひて親み合ひて、筵會〜歡び樂み合ひて、夜は衾一つに臥し合ひたりき。

疑はしき札木合の言ひ出し

帖木眞、札木合二人親み合ふこと一年、次の年の半ま

で親み合ひて、その住める營盤より一日起たんと云ひ合ひて起てるは、夏の首の月の第十六の赤く照る日に起ちたり。帖木眞、札木合二人共に車の前に歩みて來つるに、札木合言はく「帖木眞安荅、安荅。山(兀阿剌)に挨り下馬せん。我等の馬飼(阿都兀臣)どもは、帳房(阿剌出黑)に有附かん。溯(豁勒)に挨り下馬せん。我等の羊飼(豁紐赤惕)ども羔飼(忽哩合赤惕)どもは、喉(豁斡來)(喉を養ふ食物)に有附かん(明譯)咱每如今挨著山下、放馬的得帳房住。挨著溯下、放羊的放羔兒的喉嚨裏得喫的」と云へり。帖木眞は、札木合のこの言を覺りかねて、默〻立ちて後れて起つ間、車どもを待ちて起たんと〻、帖木眞は、訶額侖額客に「札木合

孛兒帖兀眞の穎悟

安荅は言へり。「山(阿兀剌)に挨り下馬せん。我等の馬飼(阿都兀臣)どもは、帳房(阿剌出黑)にありつかん。溯(豁勒)に挨り下馬せん。我等の羊飼(豁紐赤惕)ども羔飼(忽哩合赤惕)どもは、喉(豁斡來)にありつかん」と言へり。我は、彼のこの言を覺りかねて、彼への答を何とも言はざりき、我母に問はんとて來ぬ、我」と云へり。訶額侖額客の聲せざるに、孛兒帖兀眞言はく「札木合安荅は、厭き易〻と云はるゝなりき。今我等を厭く時となれり。只今の札木合安荅の語れる語は、我等を便ち圖らんとする言ならん。我等は勿下馬せそ。この動きたるに依り爽かに離れ、夜通〻掛けて動かん便ち」と云へり。

別速惕の家に遣れる闊闊出

孛兒帖兀眞の言にて、善〜と〜て下馬せず、夜通〜動きて來つる閒に、途に泰赤兀惕を過ぎたり。泰赤兀惕も驚きて、本夜便ち指〜向きて札木合の處に動きたり。泰赤兀惕の「伴なる」別速惕氏の營盤に一人の小き闊闊出と云ふ子を營盤に遺〜たるを、我が衆取りて來て、訶額侖額客に與へたり。「それを」訶額侖額客養へり。

その夜夜通〜〜て、日明くれば見れば、札剌亦兒（親征錄元史）札剌兒部（元史また）押剌伊而部）の合赤溫脫忽喇溫、合喇孩脫忽喇溫、合喇勒歹脫忽喇溫、この三人の脫忽喇溫兄弟、夜通〜〜合ひて來たりき。又塔兒忽惕の（所出詳かならず。）合荅安荅勒都

從ひ來ぬる諸部の衆

兒罕、兄弟五人の塔兒忽惕も來たりき。又蒙格禿乞顏の子翁古兒等も、敞失兀惕（所出詳かならず。）巴牙兀惕（卷一なる馬阿里黑伯牙兀歹の奇輟耕錄蒙古七十二種の中の伯要歹氏、元史の伯岳吾氏又伯牙吾氏）と共に來たりき。巴嚕剌思より忽必來（親征錄元史）、虎必來）、忽都思、兄弟ども來ぬ。忙忽惕より哲台、多豁勒忽、徹兒必、（徹兒必は、官名なり。後に任ぜられたる官の名を以て追稱せり。次の斡歌連雪亦客禿も同じ。）兄弟二人來ぬ。孛斡兒出の弟斡歌連、徹兒必（元史食貨志の斡闊烈闊里必）も、阿嚕剌惕（元史博爾忽の傳）阿兒剌氏）より離れて、その兄孛斡兒出に合ひに來ぬ。者勒篾の弟（蒙語迭兀、單稱の弟にて、察兀兒罕のみに係り、速別額台には係らず）察兀兒罕、速別額台巴阿禿兒（親征錄）速不台拔都、（元史速不台また雪不台）は、兀唄罕（元史、元良合、又兀良罕氏）より離れて、者勒篾に合ひに來ぬ。別速惕よ

り迭該、窟出古兒、兄弟二人も來ぬ。速勒都思（元史遜都思氏）より赤勒古台、塔乞、泰赤兀歹、兄弟どもも來ぬ。札剌亦兒の薛扯朶抹黑も、阿兒孩合撒兒、巴剌なる二人の子と來ぬ。晃豁壇より雪亦客禿徹兒必も來ぬ。速客虔の者該晃荅豁勒の子速客該者溫も來ぬ。捏兀歹察合安兀洼も來ぬ。（捏古思氏の察合安兀洼。捏古思氏は、赤那思氏とも云ふ、喇失惕額丁に依れば、察剌孩傾忽の二子堅都赤那、烏魯克眞赤那の裔なり。）斡勒忽訥兀惕の輕吉牙歹、豁囉剌思（卷一なる豁哩剌兒の複稱。親征錄元史）より火魯剌思）より薛赤兀兒、朶兒邊より抹赤別都溫も來ぬ。亦乞咧思（親征錄）亦乞剌思、（元史）亦乞列思）の不圖（親征錄元史）孛徒、（元史本傳）孛禿）も、こゝに塔とならに行くに依り來ぬ。（不圖は、帖木眞の妹帖木侖の夫となれり。）那牙勤より

豁兒赤兀孫の符命の宣揚

種索も來ぬ。斡囉納兒（元史、斡剌納兒、斡耳納、斡魯納台氏）より只兒豁安も來ぬ。巴嚕剌思より速忽薛禪も、合喇察兒なる子と來ぬ。（この合喇察兒は名高き帖木兒駙馬の五世の祖なり。）又巴阿嚻の豁兒赤兀孫額不堅（豁兒赤兀孫翁）、闊闊搠思も、あまたの巴阿嚻と一團來ぬ。

豁兒赤來て言はく「孛端察兒孛黑多（孛端察兒賢人）の拏へて取れる婦人より生れたる我等の祖は、札木合の祖と腹一つの胞漿一つの者なりき、我等。札木合より離れざるものなりき、我等。神告（神の御告）降りて、我が目に見せたり。慘白き乳牛來て、札木合を繞りて行きて、その家車に觸るゝと、札木合に觸れて、片方の角を折りて、片角とな

りて、「我が角をおこせ」と云ひ云ひ、札木合の處に吼え吼え、土を揚げ揚げ立ちたり。角無き慘白き牡牛は、大なる帳房の牀を上に擡げて、駕〜て拽きて、帖木眞の後より大車路に依り吼え吼え來るに、「皇天后土議り合ひて、帖木眞を國の主人と爲れと云ひ、國を載せて持ちて來たり」と云ひ、神告を目に見せて我に告げたり。帖木眞汝、國の主人と爲らば、我を「我がかく」告げたる故に、いかにか樂まゝむる、汝」と云へり。帖木眞言はく「實にかく國を知らゝめば(管知せゝめば)、萬戸の官人と爲さん」と云へり。「豁兒赤は」「多き理由を告げたる人を我を萬戸の

豁兒赤の欲望

官人と爲すとも、何の樂みか有らん。萬戸の官人と爲〜て、國の美〜き好き少女らを自在に取らゝめて、三十人も婦人あらゝめ、又何にても我が語ることを迎へ聽け」と云へり。(前段に豁兒赤兀孫を翁と云へるは、後に與へたる尊稱を以て追記せるなり。婦人をあまた望みたるを見れば、この時はまだ壯かりしならん。)

忽難を頭とせる格你格思の一團も來ぬ。又荅哩台斡惕赤斤の一團も來ぬ。札荅嚩より木勒合勒忽も來ぬ。又溫眞(親征錄)嫩眞部)撒合亦惕(親征錄)撒合夷部)の一團も來ぬ。札木合よりかく離れ動きて、乞木兒合小河の阿亦勒合喇合納に下馬〜て居る時、又札木合より離れて、主兒勤(即ち

札木合より離れ來ぬる諸部の衆

卷一の禹兒乞）の莎兒合禿主兒乞（卽ち卷一の忽禿黑禿禹兒乞）の子撒察別乞（卽ち卷一の薛扯別乞）泰出（卽ち卷一の台出）二人の一團、又捏坤太石の子忽察兒別乞（親征錄元史）火察兒）の一團、又忽禿剌罕（卷一の闊剌合罕）の子阿勒壇斡惕赤斤（卷一の阿勒壇）の一團、是等は又札木合より離れ動きて、帖木眞に乞木兒合小河の阿亦勒合喇合納に下馬して居る處に會ひ下馬せり。其處より起ちて、古咧勒古山の內なる桑古兒小河の合喇主嚕堅（卷二の合喇只嚕堅）の闊闊納兀兒（青き湖水）に下馬せり。

二たび古咧勒古の青湖の札營

阿勒壇、忽察兒、撒察、別乞等議り合ひて、帖木眞に言へらく「汝を罕と爲さん。帖木眞を罕となさば、我等は多

成吉思合罕推戴の盟

き敵に先鋒に奔りて、顏好き少女妃を、帳殿の房「に入りて、得て伴れ來て與へん、我等。」他國民の顯美〜き妃少女を、臂節好き騸馬に騎ら〜めて伴れ來て與へん、我等。野の獸を卷狩せば、先驅〜て與へん、我等。（卷六なる成吉思汗の阿勒壇忽察兒を責めたる語と較ぶるに、こゝにも一句脫ちたるに似たり。）噴野の獸の腹を一竝に寄せて與へん、懸崖の獸の腿を一竝に寄せて與へん、我等。戰ふ日に汝の號令に違はば、我等の家業より妃婦人より離れさせて、我等の黑き頭を地の土に棄てて去れ。平けき日に汝の協議を壞らば、我等の男どもの家業より妻子より別れさせて、主なき地に棄てて去れ。」かく言を

定め合ひて、これより盟して、帖木眞を成吉思合罕（強盛なる大君）と名づけて、罕となゝたり。（帖木眞の汗となれるは、蒙古源流に據れば、己酉の年にゝて、二十八歳の時なり。己酉の年は、我が後鳥羽天皇文治五年、宋の淳熙十六年、金の大定二十九年、西紀一一八九年なり。）

新庭の政務分任

成吉思合罕、罕と爲ると、孛斡兒出の弟斡歌來徹兒必（前の斡歌連徹兒必）、箭筒を帶べり。合只溫脫忽喇溫（前の合赤溫脫忽喇溫）、箭筒を帶べり。哲台、多豁勒忽徹兒必、兄弟二人、箭筒を帶べり。（箭筒を蒙語に豁兒と云ひ、箭筒を帶ぶる者を豁兒臣又は豁兒赤と云ふ。元史塔察兒の傳に「火兒赤者、佩櫜鞬侍左右者也」とあるは、これなり。）

豁兒赤

巴兀兒赤

汪古兒（前の翁古兒）、雪亦客禿徹兒必、合荅安荅勒都兒罕三人言はく「朝の飲物を勿缺かせそ。夕の飲物を勿慢りそ」とて、巴兀兒臣と爲れり。（巴兀兒臣、また巴兀兒赤と云ふ。元史兵志に「親烹餌以奉上飲食者、曰博爾赤」とあるは、これなり。）迭該言はく「二歳の羯羊を渴かゝめて、朝に勿缺きそ。寢ぬる時に勿後れそ。花の色の羊を牧して、車底に滿さん。黃色の羊を牧して、圈子に滿さん。貪食は惡くありき、我。羊を牧して、白腸を食はん、我」とて、迭該は、羊を牧せり。（羊を豁紉と云ひ、羊飼を豁你臣又は豁你赤と云ふ。元史兵志の火你赤は、これなり。）その弟古出古兒（前の窟出古兒）言はく「鎖ある車を、その轄を勿倒れゝめそ。車軸ある車を、車路の上に勿壞れゝめそ」と云ひて、「房車を治めん」と云へり。多歹扯兒必（前に見えざる人）は、「家の內の婢僕どもを統べん」と云へり。忽必來、赤勒古台、合兒孩脫忽喇溫（前の合喇孩脫忽喇溫）三人に「合

豁你赤

抹赤卽ち木匠

兀勒都赤

阿黑塔赤
阿都兀赤

撒兒と共に刀を帶びて、勢ふものは、その首を斬れ。荒（古出兒格昆）ぶるものは、その胷を刺せ（輕古哩惕 斡抹里兀 汪剌只惕）」と云へり。（刀を兀勒都と云ひ、刀を帶ぶる者を兀勒都赤と云ふ。元史兵志に「侍上帶刀及弓矢者曰云都赤」とあるは、これなり。）別勒古台、合（合荅溫）喇勒歹脫忽喇溫二人に「騸馬を執れ。馬官（阿黑塔臣）と爲れ」と云へり。泰赤兀歹、忽圖抹哩赤（前に見え）、木勒合勒忽三人に「馬羣を牧せよ」と云へり。（馬羣を蒙語に阿都溫と云ひ馬飼を阿都兀臣と云ふ。）阿兒孩合撒兒、塔孩（前の塔乞）、速客該（前の速客該者溫）、察兀兒罕四人に「遠き豁斡察（豁剌）黑（箭の名）近き斡多喇（箭の名）となれ」と云へり。（征討巡警の事を掌れるならん。官名は、いまだ考へ得ず。）速別額台巴阿都兒言はく「鼠（忽咎罕）となりて、聚め合はん。黑き（合剌）老鴉（合荅溫）となりて、外にある物を收め合はん。馬覆ひの（合兒馬勒都速 結別額）

舊臣を勞ひ新附を奬むる諭旨

毛氈（揑木兒列勒敦）となりて、覆ひ合はんと試みん。風除（格里思格）の毛氈となりて、家を禦ぎ合はんと試みん」と云へり。（格兒哩思格列勒敦）

そこに成吉思合罕、罕となりて、孛斡兒出、者勒篾二人に言へらく「汝等二人、我を、影（薛兀迭兒）より外に伴なき時に、影（薛兀迭兒）となりて、我が心（薛惕乞勒）を安からしめたるぞ、汝等。心（薛惕乞勒）の內に存れ」と云へり。「尾（薛兀兒）より外に鞭（赤出阿）なき時に、尾（薛兀兒）となりて、我が心（只嗣格）を安からしめたるぞ、汝等。我が胷（徹額只）の內に存れ」と云へり。「汝等二人は、前に立てるに依り、此處に居る者どもに長となりて居らずや、汝等」と云へり。又成吉思合罕言はく「皇天后土に力を添へて祐けられば、汝

等、札木合安荅の處より我をと思ひて伴とならんとて來つる老人どもは、我が福ある伴とならざらんや」と云へり。己も己も委任せり、汝等に。（この句、恐らくは脱文あらん。）

成吉思汗の卽位を聞ける王罕の賀辭

成吉思合罕を罕となしたりとて、客咧亦惕の脱斡哩勒罕に、荅孩、速格該（前の塔孩、速客該）二人を使に遣りたり。脱斡哩勒罕は、「帖木眞なる我が子を罕と爲したるは甚だ善し。忙豁勒に君なく、いかにか過さん、汝等。此の協議を勿壞りそ。協議を結べるを勿解きそ。衣の領を勿扯きそ」と云ひて遣りて。（畢りのては、たりの誤りか。然らずば、下に脱字あらん。）

成吉思汗實錄卷の三終り。

阿勒壇忽察兒に言はしむる札木合のいやみ

成吉思汗實錄卷の四。

阿兒孩合撒兒、察兀兒罕二人を札木合の處に使に遣りたれば、札木合言はく「阿勒壇、忽察兒二人に言へ」とて、言ひて遣るには「阿勒壇、忽察兒、汝等二人は、帖木眞安荅と我と二人の間に、安荅の腰窩を戳して、肋骨を攫み（速別額合必兒合合惕忽薛赤）て、何ぞ離れ〳〵めたる、汝等。安荅我二人を離れ〳〵めず一處に居る時、帖木眞安荅を罕に何ぞ爲さざりし、汝等。今何を只心に思ひてか罕となしたる、汝等。阿勒壇、忽察兒汝等二人は、言へる言に從ひ、安荅の心を安からしめて、我が安荅に善くも伴となりて與へよ」と云ひて遣り

盜みしたる札木合の弟の殺され

て、

その後札木合の弟台察兒（親征錄元史）禿台察兒）は、札剌麻（山の名）の前なる斡列該不剌黑（斡列該の泉、親征錄元史）玉律哥泉）に住める

撒阿里の原のありか

に、我等の撒阿里客額兒に居る拙赤荅兒馬剌（親征錄）搠只塔兒馬剌、元史搠只）の馬羣を盜みに往きけり。（撒阿里客額兒は、撒阿里の原にて、親征錄元史に薩里川とあり。薩里河ともあるは、非なり、河にはあらず、廣き谷なり、川なれば、谷の義にも用ふ。元史明宗紀に據るに、天曆二年正月、和寧の北に卽位し、三月、潔堅察罕の地に止まり、五月四日、斡耳罕水（斡兒桓河）の東に至り、二十三日、禿忽剌河（土兀剌河）の東に至り、六月十五日、撒里怯兒の地に至り、二十一日、闊朶傑阿剌倫に至り、それより南に進みて上都に向へり。撒里怯兒は、卽ち撒阿里客額兒なり。闊朶傑阿剌倫は、此書の末に見ゆる闊迭額阿喇勒に〜て、客魯嗹河の中洲なり。西より進みて、闊迭額島より前に撒阿里原に至れるを見れば、撒阿里原は、客魯嗹河の上流の地なるべし。金幼孜の北征錄に雙泉海、卽撒里怯兒、元太祖發跡之所、舊建宮殿、山川環繞、有二海子、西北有三關口、通飲馬河土拉河二とあり、その宮殿は、卽ち太祖紀に薩里川哈老徒の行宮とある處なれば、二海子の一つは、必ず哈老徒の海子、今の噶老台の池

荅闌巴勒主惕の戰

なら
ん。）台察兒は、拙赤荅兒馬剌の馬羣を盜みて率て去りき。拙赤荅兒馬剌は、馬羣を盜みて去られて、從者どもに心臆せられて、拙赤荅兒馬剌のみ追ひて往きて、夜その馬羣の邊に到りて、己が馬の鬣の上に腹にて伏して到りて、台察兒の脊梁を折るべく射て殺すと、馬羣を率ゐて來ぬ。

「弟台察兒を殺されたり」とて、札木合が頭となれる札荅嚩は、十三部伴なひて、三萬人となりて、阿剌兀兀惕（明譯文は阿剌兀惕）、土兒合兀惕（三山の名、親征錄）阿剌烏禿剌烏二山）に依り越えて、成吉思合罕の處へ出馬して來ぬとて、亦乞咧思よ

り木勒客脫塔黑、（親征錄）慕哥、（元史孛禿の傳）磨里禿禿）孛囉勒歹（親征錄）ト欒台、（孛禿の傳）波欒歹）二人、成吉思合罕に古咧勒古に居る處に報告を送り來ぬ。この報告を知ると、成吉思合罕は、十三團ありき。（團は、蒙語古哩延、その複稱古哩額惕なり。親征錄に十三翼と譯したるは、支那風に書きたるなり。）亦三萬人となりて、札木合の迎へに出馬して、荅闌巴勒主惕（親征錄元史）荅闌版朱思之野）に立ち合ひ（對戰）て、成吉思合罕は、札木合にそこに動かされ（敗られ）て、斡難の哲咧捏合ト赤孩（哲咧捏の險處）に遁れたり。札木合言はく「斡難の哲咧捏に遁れ〜めたり、我等」と云ひて回る時、赤那思の子ら（家の子一族）を七十の鍋に煮て、捏兀歹察合安兀注の頭を斬りて、馬の尾

七十鍋の狼の羹

に拖きて去りき。（赤那思氏は、喇失惕額丁に依れば、察剌孩領忽の二子堅都赤那、烏魯克眞赤那の裔なり。堅都赤那は牡狼、烏魯克眞赤那思は、狼なる赤那の複稱なり。親征錄の撰者は、修正祕史を譯するに當り、赤那思の姓氏なることを知らず、「半途爲七十二竈、烹狼爲食」と譯せり。）

國來の祝

そこに札木合を其處より回らすると、兀嚕兀惕（元史朮赤台の傳）兀魯兀台氏）の主兒扯歹（元史本傳）朮赤台、（畏荅兒の傳）朮徹帶）は、兀嚕兀惕（親征錄）兀魯吾部）を率ゐ、忙忽惕（畏荅兒の傳）忙兀氏）の忽余勒荅兒（朮赤台の傳）忽因荅兒、（本傳）畏荅兒）は、忙忽惕（親征錄）忙兀部）を率ゐ、札木合より離れて、成吉思合罕の處に來ぬ。晃豁壇の蒙力克額赤格（蒙力克なる父）は、そこに札木合の處に居りて、蒙力克額赤格、その七人の子と、札木合より離れて、そこに成

吉思合罕に合ひに來ぬ。札木合より此等の民來ぬとて、成吉思合罕は、己が處に國來ぬと喜びて、成吉思合罕は、訶額侖兀眞、合撒兒、主兒勤の撒察別乞、泰出らと共に、「斡難の林の裏に筵會せん」と云ひ合ひて筵會〳〵たるに、成吉思合罕に、訶額侖兀眞に、合撒兒に、撒察別乞になど首と〳〵て一つの甕（馬乳酒を入る、革の甕）を傾けけり。又撒察別乞の少き母（涉兒合禿主兒乞の妾撒察別乞の生母）額別該（親征錄元史）薛徹別吉次母野別該）を首と〳〵て一つの甕を傾けたる故に、豁哩眞合屯、忽兀兒臣合屯（涉兒合禿主兒乞の二妃。親征錄元史）忽兒眞火里眞二哈敦）二女は「我を首とせず、額別該を首と〳〵て何ぞ傾けたる」と云

主兒勤の二妃の怒

ひ、厨官失乞兀兒（親征錄元史）主膳者失丘兒）を打ちけり。打たれて厨官失乞兀兒言はく「也速該巴阿都兒、捏坤太石二人死にたる故に、かく我が打たれたるはいかに」と云ひて、大聲にて哭きけり。

その筵席を、我等よりは別勒古台整治し、成吉思合罕の騙馬を執りて立ち居りき。主兒勤よりは不哩孛闊（親征錄元史）播里）その筵席を整治〳〵居りき。我等の聚馬處より（蒙語）乞魯額思、（親征錄元史）乞列思、（錄は禁外繫馬所と注し、史は野外牧場と注せり。）合塔斤の人韁皮を盜みたるに、盜人を拏へき。不哩孛闊その人を回護ひて、別勒古台は常の如く搏ち合ふに、右の袖を脫ぎ

不哩に肩斫らる、別勒古台

て赤膚にて行きたりき。かく脫ぎたるその赤膚の肩を、不哩孛闊、環刀にて劈くべく斫り(斫り劈き)けり。別勒古台かく斫られたれども、何ともなさず爭はず、血を流〜て行くを、成吉思合罕、木蔭に居て、筵席の內より見て、出でて來て言はく「何ぞかく爲されたりし、我等」と云へるに、別勒古台言はく「傷は未なりき。我が故に兄弟に中惡く爲り合はんや。我、差支へず。我、稍好くあり。兄弟に纔に慣れ合ひ居る時、兄やめよ。暫く立ちとまれ」と云へり。

成吉思汗の棒打

成吉思合罕は、別勒古台かく勸むれども肯かず、木の枝を折るべく引き(引き折り)て、皮桶の撞乳棒を抽きだ〜て

完顏襄の塔塔兒征伐

執りて、打ち合ひて、主兒勒に勝ちて、豁哩眞合屯、忽兀兒臣合屯二女を奪ひて取れり。却て彼等に「睦び合はん」と云はれて、豁哩眞合屯、忽兀兒臣合屯二女を還〜て、睦び合はんとて使〜合ひて居る時に、乞塔惕の民の阿勒壇罕(金の章宗皇帝)は、塔塔兒の篾古眞薛兀勒圖(親征錄元史)篾兀眞笑里徒等に、その命に從はれず、王京丞相(王京は、金の國姓なる完顏の轉、金史列傳の內族襄卽ち右丞相完顏襄)に「軍を整へて、勿蹋躇ひそ、便ち」と言ひて遣りき。(金史の紀傳を見るに、この役は、金の章宗承安元年丙辰の歲にあり。我が後鳥羽天皇建久七年、宋の寧宗慶元二年、西紀一一九六年、成吉思汗三十五歲の時なり。)

「王京丞相は、篾古眞薛兀勒圖が頭たる塔塔兒を、兀勒札河(金史內族襄の傳)斡里札河、今の烏爾匝河、また烏爾載河)に泝り、馬羣糧食ごめに追

成吉思汗王罕の塔塔兒夾み攻め

捲りて來ぬ」とて、噂を知れり。その噂を知ると、成吉思合罕言はく「前の日より塔塔兒の民は、御祖なる父を失ひたる讎ある民なりき。今この機會に力合はせん（金の軍と夾み攻めん）、我等」と云ひて、脫斡哩勒罕の處に「阿勒壇罕の王京丞相は、塔塔兒の篾古眞薛兀勒圖が頭たる塔塔兒を兀勒札河に泝り追捲りて來ぬと云へり。我等の御祖なる父を失ひたる塔塔兒を夾み攻めん、我等。脫斡哩勒罕額赤格疾く來よ」とて、この傳言を致〜に使を遣りぬ。この傳言を致さるゝと、脫斡哩勒罕言はく「我が子は勺卜（丁度善し、善き機會なり）と言ひておこせたり。力合はせん、

我等」と云ひて、第三の日に軍士を聚めて、軍を起〜て、脫斡哩勒罕は、速に赴きて、成吉思合罕、脫斡哩勒罕二人は、主兒勤の撒察別乞、泰出が頭たる主兒勤（親征錄月兒斤）に言ひて遣るに「前の日より我等の御祖なる父を失ひたる塔塔兒を今この機會に夾み攻めん。諸共に出馬せん」と云ひて遣りぬ。主兒勤に來らるゝことを六日待ちて「待ち」かねて、成吉思合罕、脫斡哩勒罕二人、諸共に軍を起〜て、兀勒札に沿ひ、王京丞相と力合はせに來つる時、兀勒札の忽速禿失禿延、納喇禿失禿延（親征錄、納剌禿失圖、忽速禿失圖之野）に塔塔兒の篾古眞が頭たる塔塔兒は、そこに寨に據りき。

成吉思合罕、脫斡哩勒罕二人は、かく楯籠れる篾古眞薛兀勒圖をその寨より拏へて、篾古眞薛兀勒圖をそこに殺〜て、彼の銀の繃車、東珠ある衾を成吉思合罕そこに取りき。

篾古眞薛兀勒圖を殺〜たりとて、成吉思合罕、脫斡哩勒罕二人、(この二人の名は、上の篾古眞の上又は下の篾古眞の上にあるべきに似たり。)王京丞相は、篾古眞薛兀勒圖を殺〜けりと知ると、甚だ喜びて、成吉思合罕に札兀惕忽哩の名を與へたり。(親征錄元史 察兀忽魯。札兀惕は、百なる札溫の複稱なり。忽哩は、聚むると云ふ忽哩牙、聚會と云ふ忽喇勒などの語根なれば、牧長の義あるべし。然らば札兀惕忽哩は、百戶の長の譯語ならんか。)客咧亦惕の脫斡哩勒に王の名をそこに與へたり。王罕の名

札兀惕忽哩の官王罕の號

は、王京丞相の名づけたるに依り、その時より爲れり。王京丞相言はく「篾古眞薛兀勒圖を汝等が力合はせて殺〜たるは、阿勒壇罕に最大きなる助を爲せり、汝等。汝等の此の助を阿勒壇罕に奏〜上げん、我。成吉思合罕に此より大きなる名を加ふることを、招討の名を與ふることを、阿勒壇罕知〜めさん」と云へり。王京丞相は、そこよりかく喜びて退けり。成吉思合罕王罕二人は、そこに塔塔兒を虜へて分け合ひて取り合ひて、家家に回りて下馬せり。

塔塔兒の寨に遁れる幼

塔塔兒の楯籠れる納喇禿失禿延に下〜たる營盤の內

兒失乞刊忽都忽

主兒勤の殺掠を聞ける成吉思汗の怒

を掠むる時、一人の小き幼兒を棄てたるを我等の軍士ども營盤より得けり。金の環の鼻環ある、金絲の布に貂鼠にて裏附けたる腹掛ある小き幼兒を伴れ來て、成吉思合罕は、訶額侖額客に給事にとて與へたり。訶額侖額客言はく「好き人の子なるぞ。家系善き人の胤なるぞ。五人の子には弟、第六にて子となさん。」失乞刊忽都忽と名づけて母育へり。（後の文には失吉忽禿忽とありて、刊の字なし。親征錄元史に忽都忽、元史太宗紀に胡土虎ともあり。）

成吉思合罕の老營は、哈哩勒禿納兀兒に在りき。（哈哩勒禿湖）

親征錄哈連徒澤。露西亞の地圖に、克魯倫河の南流の東に折る、處より西南に當り、哈里隆湖あり。露國東方經營圖には、哈里隆湖なく、それより東に倚りて、ハラリオル泊あり。哈哩勒禿湖は、この二湖の內なるべし。）老營に殘れる者を、主兒勤は、五十の人の衣服を剝ぎけり。十の人を殺〜けり。「主兒勤に然爲されたり」とて、我等の老營に殘れる者ども、成吉思合罕に告げたれば、この報告を聽くと、成吉思合罕甚く怒りて言はく「主兒勤にいかでかかく爲されたり〜、我等。斡難の林に筵會せる時、厨官失乞兀兒をも彼等打ちたり。別勒古台の肩をも彼等斫りたり。睦び合はんと云はれて、豁哩眞合屯、忽兀兒臣二女を還〜て與へたり、我等。その後襄の讎あり怨ある我等の御祖なる父を失ひたる塔塔兒を夾攻に出馬せんとて、主兒勤を六日待ちても來られざりき。今又敵に倚り、敵に彼等も爲

れり」と云ひて、成吉思合罕は、主兒勤の處に出馬せり。主兒勤を、客魯嗹の闊朶額阿喇勒の朶羅安孛勒荅兀惕に居る彼等の民を虜へたり。（闊朶額洲は、卷十五に闊迭兀阿喇勒とも闊迭額阿喇勒ともあり。朶羅安は七つ、孛勒荅兀惕は孤山なる孛勒荅黑の複稱にして、七つ岡なり。親征錄）朶欒盤陀山。（卷十五の末に、朶羅安孛勒荅黑とあり。撒阿里原の東南に當れる客魯嗹の河中島の小山にして、後に成吉思汗の大斡兒朶の設けられたる處なり。）撒察別乞、泰出二人は、僅に身を遁れたり。彼等の後より襲ひて、帖列格禿阿馬撒兒に（帖列格禿の口。親征錄帖列徒之隘、元史帖烈徒之隘。露西亞の地圖に、車臣汗の駐牧地より一度ほど南に當り、和里格圖と云ふ處ありて、內蒙古に往く路に當れるは、帖列格禿の轉なるに似たり。）馳せ至りて、撒察別乞、泰出二人を拏へたり。拏へて、成吉思合罕は、撒察、泰出二人に言へらく「前の日我等は何と言ひ合ひしか」と云はれて、撒察、泰出二人言はく「言へる言に我等は從はざりき。我等の言に從はしめよ」と云ひて、その言を知らせて、任せ（頸を伸べ）て與へたり。彼等の言を知らせられて、彼等の言に從はしむべく片付け（殺へるなり。）て、直に其處に棄てたり。（前日の言とは、成吉思汗を立てたる時の盟の言を云

撒察泰出の捕り殺され

札剌亦兒の人模合里等の降附

撒察泰出二人を片付くると、回りて來て、主兒勤の民を動かする時、札剌亦兒の帖別格禿伯顏（帖列格禿の長者）の子古溫兀阿（元史木華黎の傳）孔溫窟哇、赤剌溫孩赤（元史忙哥撒兒の傳）赤老溫愷赤、者卜客三人は、その主兒勤の處に居りき。古溫兀阿は、模合里（親征錄元史）木華黎）、不合（蒙韃備錄）抹歌）なる二人の子伴れにて

主兒勒の家より得たる

見えて言はく「爾の戸口の奴となさん。爾の戸口より逃(字涉合 字斡勒 不勒)廻らば、彼の脚筋を斷れ。爾の門の近習の奴となさん。(只 字兒必 額兀顏 奄出)爾の門より離れば、彼の肝を割きて棄てよ」と云ひて與へたり。赤剌溫孩赤も、統格、合失なる二人の子を成吉思合罕に見え「〜め」て言はく「爾の金の戸口を守りて居よ」とて奉れり、我。爾の金の戸口より外に去らば、彼の命を絶ちて棄てよ。(阿秃孩 阿勒壇 阿勒壇 昂吉荅)爾の寛き門を撞げて上げよ(撞ぐる事 幹克 阿米 幹兒堅)とて奉れり、我。爾の寛き門より外に去らば、彼の心臟を蹈みて棄てよ」と云へり。(幹克 幹兒堅 幹額咧 幹都 幹咧)者卜客をば、合撒兒に與へたり。者卜客は、主兒勒の營盤より孛囉兀勒(親征錄 元史)博

幼兒孛囉兀勒

訶額侖の養子四人

羅渾、(元史本傳)博爾忽)と云へる小き幼兒を伴れ來て、訶額侖額客に見ゆべく與へたり。

訶額侖額客は、篾兒乞惕の營盤より得られたる古出(三卷の曲出)と云ふ幼兒を、泰赤兀惕の內なる別速惕の營盤より得られたる闊闊出と云ふ幼兒を、塔塔兒の營盤より得られたる失吉刊忽秃忽と云ふ幼兒を、主兒勒の營盤より得られたる孛囉兀勒と云ふ幼兒を、この四人を家の內に養ふに、訶額侖額客は、「子ども[の爲]に、晝は視る(兀都兒 兀者)目、夜は聽く耳(雪泥 涉那思)と誰に爲らゝめんか」とて、家の內に養へり。

主兒勤の民の緣由

この主兒勤の民の緣由。主兒勤と爲るには、合不勒罕の七人の子の大兄斡勤巴喇合黑ありき。其の子莎兒合禿主兒乞ありき。主兒勤となるには、合不勒罕の子どもの兄と云ひて、その民(亦兒堅)の中より擇びて、肝(ら)に膽ある、拇指(赫咧該)にて善く射る、肺(阿兀失吉)滿つる心ある(胸に肺の滿ちたる)、口(阿堡)滿つる(大聲を發する)剛氣ある、男(額咧)ごとに技能(額兒迭木惕)ある、猛き氣力あるを擇びて、與へて、剛氣あり膽あり勇あり抗ふ者無き(語蒙拙)兒乞篾思、(明譯)但有去處、皆攻破、無人能敵)が故に、主兒勤と云はれたる緣由かくあり。かゝる勇ある民を成吉思合罕は降服はせて、主兒勤姓ある者を滅せり。彼等の民を部落を、成吉思合罕は、己が昵近の民となしたり。

別勒古台に殺さる、不哩孛可

成吉思合罕は、一日不哩孛可、(前の不哩孛闊)別勒古台二人に搏ち合はしめん(相撲取らせん)と云へり。[先に]不哩孛可は、主兒勤の處に居たりき。不哩孛可は、別勒古台を片手にて拏へて片足にて撥れて倒して動かせず壓着けたりき。不哩孛可は、國の孛可(士力)。そこに別勒古台、不哩孛可二人を相撲せしめたり。不哩孛可は、勝たれざる人[なれども、殊更に]倒れて與へたり。別勒古台は、壓着けかれ、肩把りて、臀の上に上りて、別勒古台顧みて、成吉思合罕を見れば、合罕は下脣を咬めり。別勒古台悟り得て、彼の上に

馬乘〻て、彼の二つの領を交へ扼へて、彼の脊梁を膝に据ゑて折りて遣りたり。不哩孛可は、脊梁を折られて言はく「別勒古台に勝たれ(負け)ざるなりき、我。合罕を恐れて、佯り倒れ猶豫ひて、命を取らせたり、我」と云ふと、死にて去りぬ。別勒古台は、彼の脊梁を扯き折ると、引摺りて除けて去りぬ。合不勒罕の七人の子の兄斡勒巴兒合黑ありき。次に巴兒壇巴阿禿兒ありき。その子也速該巴阿禿兒ありき。(明譯この間に下の句あり。)也速該子、卽是太祖。)彼(巴兒壇)の次に忽禿黑圖蒙列兒(卷一の忽禿黑禿蒙古兒)ありき。その子不哩ありき。取り合ひ(物を爭ひ)て、巴兒壇巴阿禿兒の子より隔たり、巴兒合黑の勇ある子らに伴となれるが爲に、不哩孛可、國の孛可、別勒古台に脊梁を折られて死にたり。

十一部の札木合推戴

その後雞の年(我が土御門天皇建仁元年辛酉、金の章宗泰和元年、宋の寧宗嘉泰元年、西紀一二〇一年、成吉思汗四十歲の時)、合塔斤、撒勒只兀惕(親征錄元史)哈荅斤、散只兀)一つになりて、合塔斤の巴忽捌囉吉が頭たる合塔斤、撒勒只兀惕の赤兒吉歹巴阿禿兒が頭たる[撒勒只兀惕]は、朶兒邊(親征錄元史)朶魯班)、塔塔兒に睦び合ひて、朶兒邊の合只溫別乞が頭たるもの、塔塔兒の阿勒赤塔塔兒(塔塔兒の分部の名。親征錄元史)案赤塔塔兒)の札隣不合が頭たるもの、亦乞咧思(親征錄元史)亦乞剌思)の土格馬合が頭たるもの、翁吉喇惕(親征錄元史)弘吉剌)の迭兒格克額篾

勒（親征錄）帖木哥阿蠻。明譯は、二人とせり。今親征錄、喇失惕の集史の一人とせるに從ふ。）、阿勒灰等、豁囉刺思（卷一の豁哩剌兒姓。親征錄元史）火魯剌思）の綽納黑、察合安が頭たるもの、乃蠻より古出兀惕乃蠻（乃蠻の分部の名）の不亦嚕黑罕、（親征錄）盃祿可汗、元史）不魯欲罕。魯欲は、欲魯の誤りなり。）篾兒乞惕の脫黑脫阿別乞（親征錄）脫脫別吉）の子忽禿（親征錄）和都（また）火都）、斡亦喇惕（親征錄元史）斡亦剌）の忽都合別乞（親征錄）忽都花別吉）、泰赤兀惕の塔兒忽台乞哩勒禿黑（親征錄）塔兒忽台希憐禿）、豁敦斡兒長（親征錄）忽敦忽兒章）、阿兀出巴阿禿兒（親征錄）阿忽出拔都、喇失惕の集史）阿忽出巴哈都兒）等の泰赤兀惕、此等の部落は、阿勒灰不剌黑（阿勒灰の泉、親征錄元史）阿雷泉）に聚ひて、札荅闌の札木合を君に戴かんとて、牡馬を腰斬に斬り合ひて盟ひ合ひて、其處より額兒古捏木哩（額兒古捏河、水道提綱の額爾古納河、朔方備乘の額爾古訥河）に沿ひ起ちて、刊木哩（刊河。親征錄元史）の額兒古捏に注ぐ出島の犍河、召烈台抄兀兒の傳）堅河、（龍沙紀略の根河、中俄分界圖の旱河）の角（元史）禿律別兒河岸、（抄兀兒の傳）忽蘭也兒吉、（赤き崖、即ち赤壁）にて、札木合を其處に古兒罕（普き君、すめらぎ。合木渾罕に同じ。親征錄）局兒可汗、元史）局兒罕）に戴きたり。古兒罕に戴くと、成吉思合罕王罕二人の處に出馬せんと云ひ合へり。出馬せんと云ひ合へるを、豁囉剌思の豁哩歹（親征錄）火力台）は、成吉思合罕に古咧勒古に居る處に此の報告を致して遣りき。この報告に來らゝと、成吉思合罕は、王罕にこの報告を致して遣りたれ

豁哩歹の急報

兩軍先鋒の呼び合ひ

ば、王罕は、報告を致さるゝと、軍を起して、急ぎ成吉思合罕の處に王罕到りて來ぬ。

王罕に來らるゝと、成吉思合罕王罕二人一つになりて、札木合の迎へに出馬せんと云ひ合ひて、客魯涅河に沿ひ出馬するに、成吉思合罕は、阿勒壇、忽察兒、荅哩台三人を先鋒に行かゝめたり。王罕は、桑昆（王罕の子。親征錄元史亦赤台の傳）鮮昆）、札合敢木、必勒格別乞三人を先鋒に行かゝめたり。この先鋒より前へ又斥候を遣るに、額捏堅歸列禿に（親征錄）捏干貴因都（捏の上額の字を脱し、列は因と誤れり。）一坐の斥候を放ちたり。其の彼方徹克徹兒（卷一卷二の扯克徹兒、親征錄徹徹兒山また徹兒山）に一坐の斥候を放たゝめたり。其の彼方赤忽兒忽（親征錄赤忽兒黑山）に一坐の斥候を放たゝめたり。我等の先鋒阿勒壇、忽察兒、桑昆等、兀惕乞牙に到りて、下馬せんと言ひ合ひ居る時、赤忽兒忽に放てる斥候より人走りて來て「敵來ぬ」と云ふ報告を送り來ぬ。その報告來ると、下馬せず、敵の迎へに（敵を迎へて）報告を取らん（偵察せん）とて、行きて近づきて、報告を取り（偵察し）て、備ありやと探れば、札木合の先鋒は、忙豁勒より阿兀出把阿禿兒、乃蠻の不亦嚕黑罕、篾兒乞惕の脫黑脫阿別乞の子忽禿、斡亦喇惕の忽都合別乞、この四人、札木合の先鋒に行きけり。我等の先鋒は、彼等の處に呼び

合ひて叫びて、晩になられて、「あす戰はん」と言ひて、退きて大軍に合ひ宿れり。

明日行かゝめて、近づきて闊亦田（親征錄元史）闊亦壇）に對陣ゝて、下りつ上りつ挑み合ひ勢揃ゝ合ひて居る時、彼等、不亦嚕黑罕、忽都合二人、呪（語蒙札荅）を知りて居りき。呪ゝたるに、風雨（語蒙札荅、呪ひて起したる風雨）翻りて、彼等の上に風雨となりき。彼等行く能はずゝて溝の裏に倒るゝと、「上帝に愛まれざりき、我等」と言ひ合ひて潰えけり。（札荅の事は、輟耕錄卷四に「往往見蒙古人之禱雨者、惟取淨水一盆、浸石子數枚而已、其大者若雞卵、小者不等、然後默持密呪、將石子淘漉玩弄、如此良久、輒有雨、石子、名曰鮓荅、乃走獸腹中所產、獨牛馬者最妙、恐亦是牛黃狗寶之屬耳」金幼孜の北征錄に「永樂八年五月二十八日、發雙清源、午至河、縛筏渡水、得一木板、上有斛字、譯史

風雨の呪

讀之、乃祈雨之言也、斛語謂之札達、華言云訊風雨、蓋斛中有此術也」東華錄に載せたる康熙五十六年の勅諭に「書冊所載有所謂雷斧雷楔、大約得自深林者皆石、得自平原者皆銅、朕所得最多、將小石一塊置於泉水攪之、卽可祈雨、蒙語謂之查達齊、書冊則曰查達也」方觀承の松漠草詩の注に「蒙古西域祈雨、以楂達石浸水中、呪之、輒驗、楂達生駝羊腹中、圓者如卵、扁者如虎脛、在腎似鵝鴨嘴者良、色有黃白、駝羊有此、則漸羸瘁、生剖得者尤靈」などあり。この迷信は、古に起りて今も變はらずにあり と見ゆ。）

乃蠻の不亦嚕黑罕は、阿勒台山の前なる兀魯黑塔黑（親征錄）兀魯塔山）を指し、離れ動きけり。（阿勒台山は、古の金山、清一統志の阿爾泰山にして、綿亙二千餘里、その最大幹は、烏布薩諾爾の西北に在り。清露兩國の界をなし、科布多城の北に當れり。古出兀惕乃蠻の王庭のありし兀魯黑塔黑の地は、阿勒台山の前卽ち南に在りと云へば、卽ち今の科布多地方なるべし。）箋兒乞惕の脫黑脫阿の子忽禿は、薛涼格河を指ゝ動きけり。斡亦喇惕の忽都合別乞は、林を爭ひ、失思吉思を指ゝ動きけり。泰赤兀惕の阿兀出巴阿禿兒

諸部の潰走

成吉思汗の泰赤兀惕追擊

は、斡難河を指〜動きけり。札木合は、己を君に戴きたる民を虜ふると、額兒古捏河に沿ひ札木合は回り動きけり。彼等をかく潰や〜て、王罕は、額兒古捏河に沿ひ札木合を追ひたり。（この時、札木合は、蓋王罕に降れり。）成吉思合罕は、斡難河の處に泰赤兀惕の阿兀出巴阿禿兒を追ひたり。阿兀出巴阿禿兒は、その部落の處に到ると、部衆を急が〜動か〜て、阿兀出巴阿禿兒、豁敦斡兒長「等の」泰赤兀惕は、斡難河のかなたの邊にあまたの楯（蒙語明譯方牌）もてる軍士を整へて、戰はんとて整へて立ちけり。成吉思合罕到ると、泰赤兀惕と戰へり。頗る返す返す戰ひて、晩になられて、

成吉思汗の重傷を者勒篾の看護

裸盜人

その戰へる地に抗ひ合ひて宿れり。部衆も急ぎて來て又そこに軍士どもと一つに團をな〜て宿り合へり。

成吉思合罕は、その戰ひの中に頸脈を傷けられて、血を止むれども止まらず、惱まさるゝ時、日落ちて、すぐ其處に抗ひ合ひて下馬〜て、塞がれる血を者勒篾吮ひ吮ひ口を血まみれに〜て、者勒篾は他の人に賴らず、守り合ひて居て、夜半になるまで塞がれる血を口に滿た〜嚥みては吐きて、夜半を過ぐれば、成吉思合罕心醒めて言はく「血乾きて了へり。喉渴けり、我」と云へり。そこより者勒篾は、帽靴上衣下衣都てを脫ぎて、只褌ある赤

裸にて、抗ひ合ひて立てる(陣どれる)敵の内に走りて、かなたに圍をなせる民の車に上りて、馬乳を尋ねて得ず〳〵て[……。敵は]急げる時、騏馬を乳搾らずに放ちたるなりき。馬乳を得かねて、一つの大なる蓋桶の乳酪をその車より取りて擡げて來ぬ。その閉往くにも來るにも人に見られざりき。上帝は只護り給ひたるぞ。乳酪の蓋桶にあるを持ち來て、その者勒篾自ら水を尋ねて持ち來て、乳酪を調合〳〵て合罕に飲ませたり。三たび休みて飲みて、合罕言はく「我が心眼明るくなれり」と云ひて、欠〳〵起きて坐わりつゝ、日明けて明るくなりて見

れば、その坐われる周圍は、者勒篾の吮ひ吮ひ塞がれる血を吐きたる周圍は、泥濘となれりけり。成吉思合罕見て言はく「こは何となれる。遠く吐かばいかにありけん」と云へり。それより者勒篾言はく「爾の惱まさるゝ時、遠く去らば爾より離れんことを怕れて、急ぎて嚥むをば嚥みて、吐くをば吐きて、遽てて我が腹にも幾ばくかは入りぬ」と云へり。成吉思合罕又言はく「我がかくなりて臥〳〵居る程に、赤裸にて何ぞ走りて入りたる、汝。捕へられば、我をかくあるを告げざらんや」と云へり。者勒篾言はく「我が心には、赤裸にて往きて、も〳〵捕へられば「我、

汝等に投ずる心ありき。覺りて捕へて殺さんとて、我が衣服都てを脱ぎて、只褌を脱がざるに、忽ち遁れて、汝等の處にかく馳せて來ぬ、我」と言はん[考へ]なりき。我を實となゝて、衣服を我に與へて世話するならん。我馬に乘りて見つゝ、かゝる閒に來ざることあらんや、我。〜か思ひて、合罕の渴き惱める心を愈さんとて、眼黑く(太腔〜)かく思ひて往きけり、我」と云へり。成吉思合罕言はく「今何をか云へる。前の日三つの箋兒乞惕來て、不兒罕嶽を三たび遶らゝめたる時、我が命を一たび持ちて出でたりき、汝。今又乾きてある血を口にて吮ひて、我が

者勒篤の三つの恩

命を開きたり、汝。又渴きて惱み居る時、命を棄てて、敵人の處に眼黑く入りて、飲物足りて我が命を入らゝめ(とりとめ)たり、汝。汝がこの三つの恩を我が心の內に存せん」と勅ありき。

帖木眞を喚べる合荅安

日明け了れば、抗ひ合ひて宿れる軍士ども、夜便ち潰えたりき。團をなゝたる民は、逃るゝ能はずとて、團をなゝたる地より動かざりき。走れる部衆を止めんとて、成吉思合罕は、宿れる地より出馬〜て、走る民を止めつゝ行く時、峠の上に一人の紅き上衣の婦人、「帖木眞よ」とて大聲に喚び、哭きつゝ立てるを、成吉思合罕自ら聽

きて「いかなる人の妻にてかく喚びたる」と問はせに人を遣りぬ。その人往きて問ひたれば、その婦人言はく「鎖兒罕失喇の女、我合荅安と云ふもの。我が夫をこゝに軍士ども擎へて殺〜たり。夫を殺さるゝ時、帖木眞を、我が夫を救ひ給へとて、叫びて喚びて哭きたり、我」と云へり。その人來て、成吉思合罕にこの言を述ぶれば、成吉思合罕この言を聽くと、馬を走ら〜て到りて、成吉思合罕は、合荅安の處に下りて抱き合へり。彼の夫をば我等の軍士ども先に殺〜たりき。かの民を引戻すと、成吉思合罕の大軍は、すぐ其處に下馬〜て宿れり。合荅安を

後れて來ぬる鎖兒罕失喇

召びて來させて傍に坐ゐたり。明くる日鎖兒罕失喇、者別（親征錄 元史）哲別（元史また遮別、折不、哲伯、只別、者必、闊別、柘柏など）二人、「卽ち」泰赤兀惕の脫朶格の家人なるその二人も來ぬ。成吉思合罕は、鎖兒罕失喇に言へらく「頸（古主渾）の上の重き木（坤都）を地（闊薛兒）に去てさせたる、衣領（札合）の上の枷（札兒必牙勒）の木を免れ（札亦剌兀勒）させたる汝等父子どもの恩あり〜ぞ、汝等。いかでか後れたる、汝等」と云へり。鎖兒罕失喇言はく「我心に見在倚仗に思ひて居りき。いかんぞ急がん、我。急ぎて先に來ば、我が泰赤兀惕の官人等、我が殘れる妻子馬羣糧食を灰の如く廢滅せん、彼等」と云ひて急がず、今合罕の處に合はんと追掛けて來ぬ、

戰馬を射たる者別那顏

我等」と云へり。語り了ふれば、善〜と云へり。

又成吉思合罕言はく「闊亦田に對陣〜て挑み合ひ勢揃〜合ひて居る時、彼の嶺の上より箭來て、我が戰ふ口白き黃馬の鎖子骨を折るべく、誰か射ける、山の上より」と云へり。その言につき者別言はく「山の上より我射けり。今合罕に死なゝめられば、掌の如き地を汙〜て殘らん。恩賜せられば、合罕の前に、深き水を横ぎり、光る石を碎くべく衝きて與へん。到れと云ふ地に青石を破り、出でよと云ふ地に黑石を裂くべく衝きて與へん」と云へり。成吉思合罕言はく「敵となりたる人は、殺〜たることを、敵對〜たることを、身を隱〜て、話を諱みて怕るゝなり。この事こそはと云へば、却て殺〜たることを、敵對〜たることを諱まず、却て告げたり。伴とすべき人なり。」只兒豁阿歹と云ふ名なりき。「我が戰ふ口白き黃馬を鎖子骨を射たる故に、者別と名づけて、戰は〔〜め〕ん、彼を〕とて、者別と名づけて「我が前に行け」と勅ありき。（戰ふ口白き黃馬、蒙語に者別列古阿蠻察罕忽剌。者別列古は戰ふ、阿蠻は口、察罕は白き、忽剌は黃馬なり。者別列古忽剌卽ち戰馬を殺したる故に、戰馬に代りて働けとて者別と名を賜ひたるなり。然るを明譯文に「者別、軍器之名也」とあるは、本文の意に非ざる上に、俗文譯の文體に似ず。後人のさかしらに加へたるものなるべし。）者別、泰赤兀惕より來て伴となれる緣由かくあり。

成吉思汗實錄卷の四終り。

泰赤兀惕の誅滅

主君を拏へたる失兒古額禿翁

成吉思汗實錄卷の五。

成吉思合罕は、そこに泰亦兀惕を虜へて、泰赤兀惕の骨ある人を、阿兀出巴阿禿兒、（親征錄は、前後に阿忽出拔都と云ひ、ここには沆忽阿忽出と云ふ。喇失惕の集史も、前後に阿忽朱巴哈都兒と云ひ、こゝには昂忽兀忽出と云ふ。その實は同じ人なり。元史は阿忽出を省きてたゞ沆忽と書きたれば、阿忽出とは益遠ざかれり。）豁團斡兒昌（卷四の豁敦斡兒長）、忽都兀荅兒（親征錄忽都荅兒）等なる泰亦兀惕を、子孫の子孫に至るまで、灰の如く刮き拂ひ誅滅せり。彼の部落の民を動かゝめて來て、成吉思合罕は、忽巴合牙（親征錄忽八海牙山）に冬籠せり。

你出古惕巴阿嘞（衆巴阿嘞の中の一部）の失兒古額禿額不堅（失兒古額禿の翁、親征錄元史本紀失力哥也不干、伯顏の傳述律哥圖）は、阿剌黑（親征錄伯顏の傳阿剌）、納牙阿

（親征錄）乃牙）なる子どもと、泰赤兀惕の官人塔兒忽台乞哩勒禿黑、林に入りて居るを、讎ある人なりきと云ひて、馬に乘ること能はざる（譯明體肥不能騎馬）塔兒忽台を拏へて、車に載せて、失兒古額禿翁は、阿剌黑、納牙阿なる子どもと、塔兒忽台乞哩勒禿黑を拏へて來る時、塔兒忽台乞哩勒禿黑の子ども弟どもは、奪ひて取らんとて追驅けて來ぬ。彼の子ども弟ども追驅けて來ると、失兒古額禿翁は、起つこと能はざる塔兒忽台を、車の上に上りてその仰むける上に跨り坐して、刀を出して言はく「爾の子弟らは、爾を奪ひて取りに來ぬ。爾を我が主君

塔兒忽台の子弟の追救

失兒古額禿翁の脅迫

を手に掛けたりと云ひて、殺さずとも、主君を手に掛けたりとて、殺さん。殺すとも、亦只殺されん、我。但その死の中に償ひを取り死なん（譯明我殺你也死。不殺你也死。不如先殺了你、我然後死）」と云ひて、跨りて大なる刀にて彼の喉を切らんとする時、塔兒忽台乞哩勒禿黑、大なる聲にて弟ども子どもに叫びて言はく「失兒古額禿は、我を殺さんとす。殺し了へば、死にたる命なき我が身を取りて去りて何かせん、汝等。我を殺さざるに疾く回れ。帖木眞は、我を殺さじ。帖木眞を、小き時に、眼に火あり、面に光ある（你元兒格明）「子」なりきとて、主なき營盤の裏に遺り

てありとて、取り去りて伴れ來て習はせたれば、習ふ如くなりとて、新〜き三歳二歳の駒を習はす如く習はし教へ行きたり。死な〜めんと云へども、死な〜むる能はざりき、我。今彼の情に入りてあり。彼の心は開けてありと言はるゝなり。帖木眞は我を死な〜めじ。汝等、我が子ども弟ども、疾く回れ。[然らずば]失兒古額禿は、我を殺〜て遣らん」と云ひて、大なる聲にて叫べり。彼の子ども弟ども言ひ合へら〜[父の命を救はんとて來ぬ、我等。失兒古額禿彼の命を死な〜め了へば、空〜き命なき彼の身を何かせん、我等。却て殺さざるに疾く回らん」

塔兒忽台の子弟のたゞもどり

納牙阿の明智

と云ひ合ひて回れり。彼等を去ら〜め(彼等去り)たる時阿剌黑、納牙阿なる失兒古額禿翁の子ども、離れたる者ども來ぬ。其等に來らるゝと、動きて來るに、途に忽禿忽勒訥兀(忽禿忽勒の隅)に到れば、そこに約牙阿言はく「我等この塔兒忽台を拏へて到らば、成吉思合罕は、我等を「正主の君を手に掛けて來ぬ」と云ひ、成吉思合罕は、我等を「正主を手に掛けて來ぬるもの、何ぞ倚信すべき人ならん。此等は、我等の處にいかんぞ伴とならん。伴となる無き人、正主の君を手に掛けたる人をば、斬ら〜めん」と云て斬ら〜められんか、我等。却て塔兒忽台を此處より放

ちて遣りて、我等、身を以て「成吉思合罕に力を與へに來ぬ、我等」と云ひて往かん。「塔兒忽台を拏へて來つ。正主の君を廢てかねて、「視るといかんぞ死な〜めん」と云ひて、放ちて遣りて、「我等、誠實に力を與へん」とて來ぬ、我等」と云はん」と云へり。納牙阿のこの言を父も子どもも善〜と〜合ひて、塔兒忽台乞哩勒禿黑を忽都忽勒の隅より放ちて遣りて、その失兒古額禿翁は、阿剌黑、納牙阿なる子どもと來ぬれば、「いかで來て」と云へり。(てはつるの誤りか。)失兒古額禿翁は、成吉思合罕に申さく「塔兒忽台乞哩勒禿黑を拏へて來つるに、却て「正主の君を視ると、いか

納牙阿等の心を成吉思汗の褒賞

札合敢不の來降

んぞ死な〜めん」と云ひて、廢てかねて、放ちて遣りて、成吉思合罕に力を與へんとて來ぬ」と云へり。その時、成吉思合罕言はく「君を塔兒忽台を手に掛けて來つるならば、正主の君を手に掛けたる人を汝等を、族を擧げて斬ら〜めらるゝなりき、汝等。正主の君を廢てかねたる汝等の心善くあり」と云ひ、納牙阿を恩賞せり。

その後成吉思合罕の處に、客咧亦惕の札合敢不(親征錄元史本紀札阿紺宇、兀赤台の傳札哈堅普)は、帖兒速惕(卷六の忽兒班帖列速惕。親征錄)塔剌速野)に居る處に伴となりに來ぬ。彼の來ぬる時、篾兒乞惕戰ひに來つれば、成吉思合罕、札合敢不は、便ち戰ひて退け

王罕也速該の安荅の交り

たり。その時土綿禿別干（萬の禿別干部。親征錄）土滿土伯夷部（元史完澤の傳土伯燕氏）、斡欒董合亦惕（あまたの董合亦惕部。親征錄元史）董哀部）、潰えたる客咧亦惕の民も、成吉思合罕に投じて來にけり。客咧亦惕の王合罕（卽ち王罕。親征錄）汪可汗）こそは、先に也速該合罕の時に、中好く平かに住み合へる頃、也速該罕と安荅と云ひ合ひたりけれ。彼の安荅と云ひ合ひたる緣故は、王罕は、その父忽兒察忽思不亦嚕黑罕の（親征錄）忽兒札胡思孟祿可汗（元史は可汗の二字を省けり。）弟どもを殺すの故に、古兒罕（親征錄）菊兒可汗（元史菊兒）なる叔父と敵に爲り合ひて、合剌溫合卜察勒（合剌溫の隘處。親征錄）合剌溫隘（元史、哈剌溫隘）に鑽り入りて、百人にて出でて、也速該罕の處

客咧亦惕の內亂

王罕の逃げ走り

に來つれば、也速該罕は、彼に己が處に來られて、己が軍にて出馬〳〵て、古兒罕を合申（河西の轉。親征錄元史の西夏）の地に逐ひて、彼の人民住具を王罕に取りて與へたる故に、安荅と爲り合へること然り。

その後王罕の弟額兒客合喇（親征錄元史）也力可哈剌）は、王罕兄に殺さるゝを逃れて去りて、乃蠻の亦難察罕（親征錄）亦難赤可汗、元史、部長亦難赤。喇失惕に依れば、乃蠻の不亦嚕黑罕の父）の處に投じけり。亦難察罕は、軍士どもを遣りて、さて王罕は、三つの城（三城は、卽ち三國にて、唐忽惕畏忽惕合兒魯兀惕）に沿ひ去りて、合喇乞荅惕（合喇乞丹の複稱、卽ち西遼。親征錄元史契丹、元史黑契丹）の古兒罕（親征錄）菊律可汗、元史曷思麥里の傳西遼闊兒汗、哈剌亦哈赤北魯の傳西遼主鞠兒可汗、卽ち西遼の葛兒罕

直魯古）の處に往きたりき。（札合敢不等の成吉思汗に降れるは、この時に在り。）そこより背きて、畏忽惕（委兀兒の複稱。唐書の回紇。親征錄元史畏吾兒）、唐忽惕（唐書の黨項、卽ち西夏人）の城を過ぐると、五匹の粘糯を拘へて、乳を擠り合ひて、駱駝の血を刺して飲み、困窮して古薛兀兒納兀兒（古薛兀兒湖。親征錄曲薛兀兒澤）に來つれば、成吉思合罕は、先に也速該罕と安荅と云ひ合ひたる緣故にて、塔孩巴阿禿兒（卷三の塔孩。親征錄塔海）、速客該者溫（親征錄雪也垓）二人を使に遣りて、客魯涅河の源より成吉思合罕自ら迎へに往きて、「飢ゑて瘦せて來ぬ」とて、王罕に科斂を斂めて與へて、團營の內に入らしめて養へり。その冬次第に起ちて、成吉思合罕は、

父の友に對する成吉思汗の厚遇

忽巴合牙に冬籠せり。

王罕の部下の怨言

そこに王罕の弟ども官人ども便ち言ひ合へらく「我等の此の罕阿合（罕なる兄）は、乏しき性あり、臭き肝を懷きて行くなり。兄弟を殺せり。合喇乞荅惕にも入りたり。又部衆をも苦めたり。今これをいかにか爲ん、我等。先の日を云へば、七歲なるを篾兒乞惕の民虜へて去りて、黑き花紋の粘糯の裘を着せて、薛涼格［の河邊］の不兀喇客額兒にて篾兒乞惕の碓を擣きたり。忽兒察忽思不亦嚕黑罕なる彼の父は、却て篾兒乞惕の民を破りて、その子をそこに救ひて來つれば、又塔塔兒の阿澤罕は、十三歲な

るを母ごめに又虜へて去りて、駝駱を牧はしめ行く時、阿澤罕の羊飼を率ゐて逃れて來たるぞ。又その後乃蠻より怕れて躲れて、撒兒塔兀兒（中亞細亞の抹哈篋惕教徒なる撒兒惕人）の地なる垂木哩（垂河、唐書の碎葉河、西遊記の吹沒鞏、西域水道記の吹河、今の珠河）に合喇乞荅惕の古兒罕の處に往きたるぞ。そこに一年を盡さず、却て背き動きて、委兀惕（前の畏忽惕）唐兀惕（前の唐忽惕）の地に沿ひて行くに、困窮して、五匹の粘瓣を拘へて乳を擠りて、駱駝の血を刺〻て飲みて、一つ盲（片目）の黑鼠の黃馬（蒙語合哩溫抹鄰、明旁譯黑鬃尾黃馬）にて、困窮〻て帖木眞なる子の處に來つれば、科斂を斂めて養へるぞ。今帖木眞なる子の處にかく行きたるを忘れて、臭き肝を懷きて行くなり。いかにか爲ん、我等」と云ひ合へり。かく言ひ合へる言を、阿勒屯阿倏黑（親征錄元史）案敦阿述）は、王罕に訐きけり。阿勒屯阿倏黑言はく「我もこの相談に入り合ひたりき。却て己が君を爾を捨てかれたり」と云ひて、そこに王罕は、かく言ひ合ひたる額勒忽禿兒（親征錄元史）燕火脫兒）、忽勒巴哩（親征錄）渾八力）、阿鄰大石（親征錄）納憐太石、後に阿鄰太石）など、弟ども官人どもを拏へさせけり。弟どもより札合敢不は躲れて、乃蠻に入りけり。（札合敢不は、王罕の西遼に走れる時、成吉思汗に降りしが、王罕歸りて後、復王罕の處に返り、こゝに至り又逃げたるなり。）彼等を繩繫け房に入らゝめて、王罕言はく「我等、委兀惕、唐兀惕の地

王罕を譏れる人人の縛られ

四部の塔塔兒の征伐

より來つる時、何とか云ひ合ひし。汝等の如く何をか思はん、我は」と云ひて、彼等の面に唾〜て、彼等の縛を解かゝめたり。罕に只唾せられて、房に居る人都てに唾て起ちて唾〜けり。

その冬冬籠〜て、狗の年（我が建仁二年壬戌、金の泰和二年、宋の嘉泰二年、西紀一二〇二年、成吉思汗四十一歲の時）の秋、成吉思合罕は、察阿安塔塔兒（親征錄元史）、察罕塔塔兒、喇失惕札干塔塔兒）、阿勒赤塔塔兒（親征錄元史）、案赤塔塔兒、喇失惕阿勒只塔塔兒）、都塔兀惕塔塔兒（喇失惕禿禿克魯惕塔塔兒）、阿魯孩塔塔兒（朶遜別勒奎塔塔兒額兒忒曼也勒奎塔塔兒）、それらの塔塔兒と荅蘭捏木兒格思（親征錄）荅蘭捏木兒哥之野）に對陣〜て戰ふ前に、成吉思合罕は、軍法を言ひ合へらく「敵人に勝

荅蘭捏木兒格思の戰

たば、財の處に勿立ちそ。勝ち了へば、その財は、我等の物なるぞ。分ち合ふぞ、我等。敵人に退けられば、初の衝きだ〜たる地にて回り戰はん。初の衝きだ〜たる處にて回らざる人をば斬ら〜めん」とて軍法を定め合へり。荅蘭捏木兒格思に戰ひて、塔塔兒を動かせり。勝ちて、兀勒灰失魯格勒只惕にて「彼等を」彼等の國に集めて虜へたり。（元勒灰河と失魯格勒只惕河と合流する處。親征錄元史）兀魯回失連眞河、（喇失惕集史）兀魯回失魯出兒只惕河。（水道提綱に據るに、薩河土名は烏爾虎河、索岳爾濟山より出で西南に流れ、烏朱穆秦左翼の東を經て、西に折れ、色野爾濟河に合ひ、右翼の界に入りて涸る。烏爾虎河は、一統志の圖に吳兒灰河とあり、卽ち兀勒灰河なり。色野爾濟は、卽ち索岳爾濟にて、山の名も河の名に同じ。この色野爾濟河は、卽ち失魯格勒只惕河なり。魯と惕とを失ひ、格は野に轉ドて、失野勒只卽ち色野爾濟となれり。露西亞の地圖には、烏爾灰を烏拉圭とし、色野爾濟を蘇攸勒奇と

し、二河合流して、昌克圖布里圖湖に入りて止まり、烏珠穆沁右翼の界へは流れ往かず。成吉思汗の勝ちて進みたる處は、その湖水の北なるべし。）察罕塔塔兒（前の察阿安塔塔兒）、阿勒赤塔塔兒、都塔兀惕塔塔兒、阿魯孩塔塔兒、重要なる民をそこに滅〜て、軍法を言ひ合ひたる言に、阿勒壇、忽察兒、荅哩台（親征錄元史）族人案彈、火察兒、荅力台）三人言に遵はず、財の處に立ちけり。「言に遵はざりき」とて、者別、忽必來（親征錄）虎必來、折別）二人を遣りて、掠めたる馬羣、何にても取りたる都てを取ら〜めたり。

阿勒壇忽察兒荅哩台の軍法違犯

塔塔兒屠戮の密議

塔塔兒を滅〜て虜へ了へて、彼等の部落人民を如何せんとて、成吉思合罕は、大評議を一族にて一の房に入りて議り合へり。議り合へらく「先の日より塔塔兒の民は、御祖なる父を失ひたるなりき。御祖なる父の讎復〜て怨報いて、車轄に比べて屠りて殺〜て與へん（明譯可將他男子似車轄大的盡誅了）。絶ゆるまで屠らん。殘れるを奴婢とせん。各に分け合はん」とて、評議定め合ひて、房より出づれば、塔塔兒の也客扯哩は、別勒古台に「いかに評議を議り合へる」と問ひけり。別勒古台言はく「汝等を都てを車轄に比べて屠らんと云ひ合へり」と云ひき。別勒古台のこの言にて、也客扯哩は、塔塔兒の處に傳說を放ちて寨に據りき。寨に據りたる塔塔兒の處に我等の軍士ども攻むるとなり、甚だ損失〜けり。寨に

別勒古台の密議漏し

據れる塔塔兒を辛苦〜て降〜て、絶やさんと車轄に比べて屠る時、塔塔兒言ひ合へらく「人ごとに袖の裏に刀を袖に〜て、償ひを取り死なん」と云ひ合ひて、又甚だ損失〜けり。かく塔塔兒を車轄に比べて屠り了へて、そこに成吉思合罕勅あり、「我等一族にて大評議を定め合ひたるを別勒古台の告げたる故に、我等の軍士ども甚だ損失せり。この後大評議の處に別勒古台勿入りそ。評議畢ふるまで外にある者を治めよ。治めて鬬毆の事を盜賊詐譌に係る事を裁斷せよ。評議畢らば、進酒を飲みたる後に、別勒古台、荅阿哩台(前の荅哩台、卷一卷三の荅哩台幹惕赤斤)二人そこに

也速干合屯の姉思ひ

入れ」と勅ありき。

そこに塔塔兒の也客扯連の女也速干合屯(元史后妃表)也速干皇后)を成吉思合罕はそこに取れり。寵でられたる故に、也速干合屯言はく「合罕恩賜せば、我を[罕の]人に物になして畜ひ給へり。我よりは、姉也遂と云ふもの我より高く、罕の人に適へるものなるぞ。この頃壻を壻とりたりき。今は蓋この騒動の裏いづくにか去れらん」と云へり。この言につき、成吉思合罕言はく「汝の姉、汝より善くあるならば、尋ねさせん。姉を來なば避けて與へんか、汝(明譯)肯將你位子讓與麼)」と云へり。也速干合

也遂合屯の壻の殺されし

屯言はく「可罕恩賜せば、姉を只見ば、姉を避けん」と云へり。この言により、成吉思合罕は、勅を傳へて尋ねさせたれば、妻されたる壻と共に林に入りて行けるに、我等の軍士ども遇ひき。彼の夫は走りき。也遂合屯（元史后妃表）也速皇后）をそこに取り來ぬ。也速干合屯は、姉を見ると、先に言へる言に遵ひ、起ちて坐れる位に坐ゐて、その己は下に坐れり。也速干合屯の言に倣ひて、成吉思合罕は、情を入れて、也遂合屯を取りて列位に坐ゐたり。

塔塔兒の民を虜へ畢へて、一日成吉思合罕は、外に坐りて酒飲み合ふに、也遂合屯、也速干合屯二女の間に坐り

て酒飲み合ひ居る時、也遂合屯大に歎きたり。そこに成吉思合罕は、心に想ひて（明疑惑了）、孛斡兒出、木合里等官人衆を喚びて來させて言はく「汝等、此の只聚れる人都てにて部落部落に立て。己より別なる部落の人を別に離れしめよ」と勅ありき。かく部落部落に立ちたれば、一人の年少き善き爽かなる人、部落どもより別に立てり。「汝は何人なるか」と云へば、その人言はく「塔塔兒の也客扯連の也遂と云ふ女を與へられたる壻人なり き、我敵に虜へらるゝ時、怕れて逃れて行きて、今鎭れるそとて來て、あまたの人の中何ぞ認められんと云ひ

王罕の篋兒乞惕征伐

て行きけり」と云へり。この言を成吉思合罕に奏〜たれば、勅あり「只又敵せんと思ひて劫賊となりて行きけり。今何を窺ひにか來し。彼が如き者どもは、車轄に比べたり。何ぞ疑はん。目の背處（目に見えぬ處）に棄てよ」と云へり。尋で斬ら〜めたり。

その狗の年、成吉思合罕の（「の」は原文に「を」なる宜と誤れり。）塔塔兒の民の處に出征〜たる時、王罕は、篋兒乞惕の民の處に出征〜て、脫黑脫阿別乞を巴兒忽眞脫窟木（親征錄元史）巴兒忽眞之隘、（卷一の闊勒巴兒忽眞脫古木）に逐ひて、脫黑脫阿の大子脫古思別乞（親征錄）土居思別吉）を殺〜て、脫黑脫阿の忽禿黑台察阿崙二女

成吉思汗王罕の乃蠻征伐

なる彼の女ども、（親征錄）忽都台察勒渾二哈敦。（女の名を合屯の名と誤れり。）彼の妃どもを取りて、忽圖、赤剌溫（親征錄）和都、赤剌溫）二人なる彼の子どもを民ごめに虜へて、成吉思合罕に何も與へざりき。

その後成吉思合罕王罕二人、乃蠻の古出古惕（乃蠻の分部の名、卷四の古出兀惕乃蠻）の不亦嚕黑罕の處に出征〜て、兀魯黑塔黑（親征錄）兀魯塔山）の鎖豁黑兀孫（鎖豁黑の水、親征錄）莎合水、（今の科布多河の上流なる索果克河）に居る處に到りて、不亦嚕黑罕は對陣する能はず〜て、阿勒台山（今の科布多城の西南なる阿爾泰の東南幹山）を越え動きたり。鎖豁黑水より不亦嚕黑罕を襲ひて、阿勒台山を越えさせ、忽木升吉兒

の、兀囉古河（劉郁の西使記の龍骨河、西域水道記の烏隆古河）に沿ひ追ひて行く時、也孛土卜魯黑（親征錄元史）也的脫孛魯）と云ふ彼等の官人斥候に行きて、我等の斥候に追はれて、山の上に走らんとし、肚帶を斷たれて、そこに拏へられき。兀囉古河に沿ひ追ひて、乞失勒巴失納兀兒（乞失勒巴失の湖、親征錄元史）黑辛爪石之野（西使記の乞則里八寺、水道提綱の奇薩爾巴思鄂模、西域水道記の鳴勒札爾巴什淖爾、また赫色勒巴什淖爾）に馳せ到りて、不亦嚕黑罕をそこに窮めたり。

王罕の心變り

そこより成吉思合罕王罕二人回りて來る時、乃蠻の戰ふ（善く戰ふ）可克薛兀撒卜喇黑（親征錄元史）曲薛吾撒八剌）は、巴亦荅喇黑別勒赤兒に（巴亦荅喇黑の酒即ち落合、親征錄）拜荅剌邊只兒之野。（水道提綱、貝德勒克河の庫冷、白兒齊爾、蒙古遊牧記、拜達里克河の庫倫、伯勒齊爾、この伯勒齊爾は、拜達里克河と查克河との落合なり。）軍を整へて戰はんとしけり。成吉思合罕王罕二人は、戰はんとて軍を整へて到りて、夕暮になられて、朝に戰はんとて陣列にて宿れり。そこに王罕その陣處に火を燒かせて、夜便ち合喇薛兀勒河に（親征錄）哈薛兀里河。（哈の下、剌の字脫ちたり。）泝りて動きけり。

札木合の讒言

そこに札木合は、（闊亦田の戰に敗れ、額兒古捏河にて王罕に降りてより、王罕の伴となりて居たれば、）王罕と共に動き合ひて行く時、王罕に札木合言へらく「帖木眞なる我が安荅は、先より乃蠻の處に使聘ありき。今は來ず。罕、罕。居る白翎雀にて我はあるぞ。渡る告天雀（阿只剌忽）

にて我が安苔はあり。乃蠻に往き〳〵ぞ。投ぜんと〳〵て後れたり」と云ひき。（親征錄）時札木合在幕下、日出、望見汪可汗立旗幟、非舊處、馳往問之曰「王知悉否。我昆弟、如野鳥依人、終必飛去。余若白翎鵲也。棲息幕上、寧肯去乎。我嘗言之矣。」（元史本紀）札木合言於汪罕曰「我於君是白翎雀、他人是鴻雁耳。白翎雀、寒暑常在北方。鴻雁遇寒、則南飛就暖耳。」意謂帝心不可保也。（白翎雀は、蒙語）合余嚕合納、（明譯白翎雀兒、訶渥兒斯の重譯雪鳥。搠米惕の字書）孩喇合納、（鷗と譯し、果勒思屯思奇の字書）孩兒合納、（海鷗と譯せり。今元史に從へり。輟耕錄卷の二十に「白翎雀、生於烏桓朔漠之地、雌雄和鳴、自得其樂」とあり。）告天雀は、蒙語必勒都兀兒、（明譯告天雀兒、訶渥兒斯の重譯野鷺卽ち雁類、洪鈞の重譯寒暑異棲之鳥。明の茅元儀の武備志なる韃靼方言に叫天兒を賓塔兒と云ふとある賓塔兒は、卽ち必勒都兀兒なり。爾雅の釋鳥に「鶪、天鷄」その郭

白翎雀と告天雀

注に「大如鶉雀、色似鶉、好高飛作聲。江東呼爲天鷄。」正字通に「鶪、俗呼告天鳥、其鳴如侖、形醜善鳴、聲高多韻。」至順鎮江府志に「噪天、又名告天、似雀而稍大、愈鳴則飛愈高、力乏、則自空投地、伏於草中。」方潛頤の夢園叢說に「叫天子、栖海濱叢草之中、遇天中晴朗、飛鳴直上雲霄、連緜不已、翻身而下、終朝若是」告天雀も叫天兒も天鵝も噪天も告天も、みな鶪の異名にして、我がひばり卽ち雲雀なり。元史の鴻鴈訶渥兒斯の雁類にても文義は通ずれども、原語の意とは異なり。）

札木合のこの言につき、兀卜赤黑台（喇失惕の集史）兀卜赤兒、紅果の名古鄂顏赤きが故に號とせりと云ふ。）古鄂巴阿禿兒（親征錄曲憐拔都）言はく「諂ひて何ぞ彼の善き兄弟を讒〳〵言へる」と云へり。

成吉思合罕、夜はすがら其處に宿りて、戰はんとて明日の朝日明けて王罕の陣處を見れば、無くなられて、「此等は、我等を燒飯と〳〵けり（明譯他將我做燒飯般撇了。喇失惕の史には、我今火坑の中に在るを王罕棄てたり。親征錄には此輩無乃異志乎）」と云ひて、そこより成吉思

成吉思汗の離れ遁り

可罕は動きて、額迭兒阿勒台の汭（即ち落合）にて渡りて、（親征錄）也迭而案臺河。この河の名は、阿爾泰山の東北幹山なる唐努嶺の東麓より出づる伊第爾河、また額德爾河に同じく、その河股は、額德爾河と齊拉圖河との落合を指せるに似たり。されども色楞格河の上流の地は、この時乃蠻の塔陽罕に屬して、その勢未だ衰へざれば、蒙古の兵そこを通るに由なし。又その地は、拜達里克河の河股の北三度ほどにあれば、拜達里克河より土拉河の方に向はんとする時、道を曲げてそこを通るべき筈なし。されば名の同じきは偶然の事にして、成吉思汗の渡れる河は、他の處にあるべし）その動きたるに依り動きて、撒阿哩客額兒に下馬せり。（親征錄）撒里川。客額兒は原にて、川も河を中にせる原なり。元史に薩里河と書きたるは、非なり。）それより成吉思合罕合撒兒二人は、乃蠻の大槩を視て人と算へざりき。

可克薛兀撒卜喇黑は、王罕の後より襲ひて、桑昆の妻子人民を住具ごめに虜へて率ゐて、王罕の帖列格禿阿

可克薛兀撒卜喇黑に王罕の襲はれ

王罕桑昆を救へる四傑

馬撒兒（帖列格禿の口）にある一半の人民馬羣糧食を虜へて率ゐて回りき。（帖列格禿の口は、卷四なる撒察泰出の拏へられたる處と名同じされども彼の地は、蒙古の南に在り、此の地は、客咧亦惕の西に在れば、同名の異地なるべし。すべて蒙古地方には、同名の地甚だ多し。帖列格禿の口も、この二處に限らず。露西亞の地圖に、科布多城の西に帖列克特山あり。その山の北に帖列克特山口と云ふ所あり。これも阿馬撒兒なるべし。されどもその地は、古出兀惕乃蠻の腹地に在りて、客咧亦惕の民の居るべき所に非ざれば、本文なる隘口は、今考ふべからず。）その戰の中に、箋兒乞惕の脫黑脫阿の忽圖赤刺溫なる二人の子そこに居り、その民を率ゐて離れて、その父に合はんと、薛涼格河に沿ひ動きけり。

可克薛古撒卜喇黑（前の可克薛兀撒卜喇黑）に掠められて、王罕は、成吉思合罕に使を遣りき。使を遣るに「乃蠻に人民住具を妻子を虜へられたり、我。子［なる汝］より汝の朶兒邊

王罕の感謝

曲魯兀惕を（四つの駿良。元史兵志また木華黎の傳に援里班曲律、猶言四傑也。とあり。）求めて遣りぬ、我。我が人民住具を救ひて與へよ」と云ひて遣りき。成吉思合罕は、そこに孛斡兒出、木合里（卷三の模合里）、孛囉忽勒（卷三の孛囉兀勒）、赤刺溫巴阿禿兒（卷二の赤老溫、親征錄）博爾朮那顏、木華黎國王、博羅渾那顏、赤老溫拔都）この四傑を軍を整へて遣りぬ。この四傑を到らする前に、忽刺安忽惕（親征錄）忽刺河山）にて桑昆は對陣となり、その馬腿を射られて捕へられんとして居る處へ、この四傑到りて救ひて、人民住具妻子都てを救ひて與へたり。そこに王罕言はく「曩に彼の善き父にかくの如く去り畢へたる部衆を救ひて與へられき。

王罕成吉思汗の父子の盟約

今又その子に去り畢へたる我が部衆を四傑に來て救ひて與へられたり。恩を報さんことを皇天后土の祐護知〜めせ」と云へり。

又王罕言はく「也速該巴阿禿兒なる我が安荅は、去りたる我が部衆を一たび救ひて與へたり。帖木眞子は、又去りたる我が部衆を救ひて與へたり。この父子二人、去り畢へたる部衆を我に收めて與へたるは、誰が前に（誰が爲に）收めて與へんと骨折りたらん。我も今老い（幹脫勒）たり。我老いて高き處（天）（溫都惕）に上らば。古りたり、我。（合兀赤惕）古りて山崖（墓地）（合勒都惕）に上らば、普き部衆を誰か管かん。我が弟どもは、德行（合木黑虎）

無くあり。我が獨子、無きが如き桑昆獨あり。帖木眞子を桑昆の兄となゝて、二人の子あるとなりて、休はん」と云ひて、成吉思合罕と、王罕は土兀剌の合喇屯（親征錄、土兀剌河上黑林間）に會ゝて、父子と云ひ合ひたり。父子と云ひ合へる理由は、先に前の日也速該罕額赤格と、王罕は安荅と云ひ合ひたる緣故にて、父の如ゝと云ひて、父子と云ひ合ひたる理由かくあり。言（誓辭）を言ひ合へらく「多き敵の處（斡難）に奔るには、共に一つに奔らん。野の獸の處に圍獵す（哈兀答喃）（哈兀答牙）（斡編阿）（阿巴剌喃）るには、一つに共に圍獵せん」と云ひ合へり。又成吉思合罕王罕二人言ひ合へらく「我等二人を妬みて、牙ある蛇（阿巴剌牙）（速都）

盟約の辭

に唆されば、「彼の」唆ゝ（雪都兒堅）（雪都兒帖）に勿入りそ。牙にて口にて言ひ合ひて信ぜん。大牙ある蛇（阿剌阿）に離閒せられば、彼の離閒を（速都額兒）（阿荅兒荅）（阿荅兒罕）勿取り合ひそ。口にて舌にて證ゝ合ひて信ぜん」と云ひ、かく言を極め合ひて、親みて住み合へり。（阿不勒察）（阿馬阿兒）

親ゝき上に重れて親ゝくならんと成吉思合罕は思ひて、拙赤（成吉思汗の長子、親征錄元史）に桑昆の妹察兀兒別乞（親征錄元史）抄兒伯姬）を索むるに、桑昆の子禿撒合に（親征錄、汪可汗之孫禿撒合、元史は孫を子と誤れり。）我等の豁眞別乞（親征錄元史）火阿眞伯姬。（元史公主表、太祖女昌國大長公主火臣別吉）を換ひ合ひて與へんとて索むれば、そこに桑昆は己を大きく思ひて言はく「我等の親屬、彼等の處に往かば、門

婚談の不協

後に立ちて專に正面を望むなり。（明譯）俺的女子到他家呵、專一門後向北立地。（卑辱なるを云ふ。）彼等の親屬、我等の處に來ば、正面に坐りて門後を望むなり（明譯）他的女子到俺家呵、正面向南坐。（尊榮なるを云ふ。）」とて、己を大きく思ひて、我等を見下〜言ひて、察兀兒別乞を與へず、親まざりき。その言にて、成吉思合罕は、心の內に王罕、你勒合桑昆（桑昆の全名なり。親征錄）亦剌合鮮昆）二人に心後れけり。（心進まず協はざるを云ふ。）

札木合等の協議讒言

かく心後れたるを札木合覺りて、猪の年（我が建仁三年癸亥、金の泰和三年、宋の嘉泰三年、西紀一二〇三年、成吉思汗四十二歲の時）の春、札木合、阿勒壇、忽察兒、合兒荅乞歹、額不格眞、那牙勒、（合兒荅乞歹以下三名は、明譯に皆種族の名とせり。那牙勒氏は、篾年土敦の子合臣の裔なり。）雪格額台、脫斡哩勒、（親征錄）脫憐、（成吉思汗の祖先の家奴の裔なり。卷六に見ゆ。）合赤溫別乞、（成吉思汗の弟なる合赤溫と異なり。）彼等共に一つの協議をな〜て、起ちて往きて、者者額兒溫都兒（者者額兒の高地。親征錄）徹徹兒運都山（元史折折運都山。明史韃靼の傳なる徹徹兒山、水道提綱哈納哈達山の東北なる徹徹山に音は似たれども、いかゞあらん。）の陰に別兒客額列惕（困難なる沙漠。親征錄）別里怯沙陀）に你勒合桑昆の處に往きて、札木合讒〜て言はく「帖木眞なる我が安荅は、乃蠻の塔陽罕（不亦嚕黑罕の兄。親征錄）太陽可汗（元史太陽罕）の處に傳言あり使あるなり。彼の口には父子と云ひて居り、彼の性行（阿不里）は別なり。倚信〜て居るなり、汝等。先圖らずば、汝等に何ぞ從はん。帖木眞安荅の處に出馬せば、我は橫より入り合はん」と云ひき。阿勒壇、忽

桑昆の繰言に迷へる王罕の優柔

察兒二人言はく「我等は、訶額侖額客の子を、兄をば殺〜て、弟をば棄てて與へん」と云ひき。額不格眞、那牙勤、合兒塔阿惕（前の合兒荅乞歹乞と阿と何れか誤りあらん。）言はく「彼の手を手取りて、彼の足を足取りて與へん」と云ひき。脫斡哩勒言はく「思ふに、往きて帖木眞をその部衆を取らん。部衆を取られば、部衆無くならば、何をかせん、彼等」と云ひき。合赤溫別乞言はく「你勒合桑昆なる子。汝何をか思はば、長き梢に深き底に到り合はん」と云ひて、

此等の言を言はれて、你勒合桑昆は、父に王罕に彼等の言を撒亦罕脫迭延（親征錄寨罕脫脫干）もて言ひて遣りき。此等の言を言はれて、王罕言く「我が子を帖木眞を何ぞかく思へる、汝等。今まで世話に彼より爲りて居て、今我が子をかく惡く思はば、上帝に愛まれざらん、我等。札木合は、走作の言ある「人」なりき。とやかくや（蒙語勺不兀塔不兀）言ふなり（明譯札木合的言語、誑誕不可信。親征錄札木合、巧言寡信人也。不足信）」と云ひて、喜ばず〜て遣りき。又桑昆言ひて遣るに「口あり舌ある人言ひ居るに、何ぞ信ぜられざらん」とて繰返〜言ひて遣りて、聽かれず〜て、己身づから往きて言く「且爾がかくある時すら、我等を何とも爲さざるなり（明譯你如今見存、他俺

行不當數)。誠に又罕額赤格、爾を白く搶かば、黑く噎ば(詞どほりに譯したれども、解し得ず。蓋上の句は、病むを云ひ、下の句は、死ぬるを云ふならん。明譯には若父親老了呵)、察合阿納撒察阿速合喇答合合阿速

忽兒察忽思不亦嚕黑罕なる爾の父の辛苦〜てかく收めて居たる爾の部衆を我等に管か〜めんや。誰にも何ぞ管か〜めんや」と云へり。その言に王罕言く「我が童我が子(桑昆)をいかんぞ捨てん。今まで世話に彼より爲りて、惡く思はば、善からんや。上帝に愛まれざらん、我等」と云ひき。その言に彼の子你勒合桑昆は憂へて、門を出でて去りき。却てその子桑昆の心を憐みて、喚びて來させて、王罕言く「上帝に蓋愛まれん、我等。子をいかんぞ捨てんと云へり。汝等能く但取計らへ。汝等知れ(明譯天莫不不愛護麼。兒子行您怎生要棄捨。您但去做可以勝得他的事。您自知者)」と云ひき。(元史忠義伯八の傳に、王罕を怯列王可汗と、桑昆を先髡と書けり。)

だまし〜うちの陰謀

それより桑昆言はく「彼等こそは、我等の察兀兒別乞を索めたりけれ。今許婚の饗(蒙語)不兀勒札兒(元史原注)布渾察兒を喫ひに來よとて、日を約〜て喚びて來させてそこに拏へん」と云ひ合ひて、然りとて協議を極め合ひて、「察兀兒別乞を與へん。許婚の饗を喫ひに來よ」とて遣りぬ。喚ばれて、成吉思合罕は、十人にて往くに、途にて蒙力克額赤格(親征錄)蔑里哥、また蔑力也赤可(伯八の傳明里也赤哥)の家に

蒙力克額赤格の警告

宿れば、そこに蒙力克額赤格言はく「察兀兒別乞を索むれば、彼等こそは、我等を見下〜て與へざりけれ。今いかんぞ特に許婚の饗を喫ひにとて喚び〜。己を大きくなせる人、特に奈何ぞ與へんとて喚びたりし。とやかくやの心あり。「我が」子氣を附けて往くべし。「春になりぬ。我等の馬羣痩せたり。馬羣を養はん」とて辭みて遣らん」と云ひて、「成吉思合罕は」往かず、不合台、乞喇台二人を許婚の饗を喫へと云ひて遣りて、(親征錄は、不花台乞察の二人を王罕より喚びに遣りたる使とせり。)成吉思合罕は、蒙力克額赤格の家より回りぬ。不合台、乞喇台二人に到られたれば、「覺られたり、我等。

掩襲の謀を漏せる也客扯連の輕率

明日の朝圍みて拏へん」と云ひ合へり。

かく「圍みて拏へん」とて言を極め合ひたるを、阿勒壇の弟(阿勒壇は、忽圖剌合罕の子、也客扯連は忽圖剌の弟忽闌巴阿禿兒の子なれば、兄弟に非ず。弟は、從弟の義なり。)也客扯連、(親征錄)也可察合蘭)は、家に來て言へらく「明日の朝帖木眞を拏へんと云ひ合へり。この言を帖木眞に言傳を致〜往く人をば、いかにか但爲さるべき」と云ひき。かく言へるにより、その妻阿剌黑亦惕(親征錄は、亦剌罕と書き、察合蘭の子とせり。)言はく「その根無〜の爾の言(明譯那泛濫言語、親征錄此無據之言)、何となるらん。家人も眞と爲さん」と云ひき。かく噂せる時、その馬飼巴歹(親征錄元史把帶、木華黎の傳拔台)は、馬乳を送りに來

て、この言を聽きて回りぬ。巴歹去りて、同役の馬飼乞失里黑に扯哩の言へる言を言ひき。（乞失里黑は、卷一の乞失黎黑なり。親征錄元史は、誤りて乞力失と書き、失力を倒にせり。哈剌哈孫の傳には、曾祖啓昔禮と云ひて、斡剌納兒氏なりとあれば、抄眞斡兒帖該の長子の裔なり。）乞失里黑言はく「我又往きて察せん」と云ひて、家に往きぬ。扯哩の子納鄰客延は、（親征錄）察合蘭次子納憐。上に亦剌罕を察合蘭の子とゝたる故に、納憐を次子とせり。）外に居て、箭を磋き居て言はく「只今我等は、何を言ひ合へる。舌を取られん。誰が口を止めん」と云ひき。かく言ふと、納鄰客延（客列客訥）は、又その馬飼に乞失里黑に言へらく「篾兒乞歹察合安（篾兒乞惕の白馬、明譯白馬）阿蠻察合安客額兒（口白き驢馬、明譯栗色馬）二匹を取りて引き來て手綱つけて「よ。」夜早く出

巴歹失乞里黑の密告

馬せん「我」と云ひき。乞失里黑去りて巴歹に言へらく「只今汝の話を慥めたり。眞となりたり。今我等二人、帖木眞に報告を送り去らん」とて、言を極め合ひて、篾兒乞惕の白馬、口白き驢馬二匹を取りて來て手綱つけて、夕に便ち房の內に一匹の子羊を殺〜て、床もて煮て（明譯將床木煮熟、親征錄拆臥榻煮熟）、篾兒乞惕の白馬、口白き驢馬二匹、目前手綱つけたるに乘りて、夜去りて、成吉思合罕に夜到りて、家の北（即ち後）より巴歹乞失里黑二人申〜て、也客扯哩の言へる言、彼の子納鄰客延の箭を磋き居て言へること、篾兒乞惕の白馬、口白き驢馬、二匹の驢

馬を取りて手綱つけよと云へる言、都てを申〜て上げたり。又巴歹乞失里黑二人申さく「成吉思合罕恩賜せば、疑ひ無くあり。圍みて拏へんとて言を極め合へり」と云へり。

成吉思汗實錄卷の五終り。

成吉思汗の逃げ走り

合剌合勒只惕の沙漠の休息

成吉思汗實錄卷の六。

かく言はれて、成吉思合罕は、巴歹、乞失里黑二人の言を信じて、夜便ち近處に居る賴るべき者に話を爲〜て、輕き何物をも棄てて遁れ、夜便ち動きたり。卯溫都兒（惡しき高地。親征錄）莫運都兒山）の陰に依り動くに、卯溫都兒の陰にて兀哨罕の者勒篾豁阿に賴りて、（者勒篾豁阿は、即ち者勒篾なり。親征錄元史）折里麥。（豁阿は、媛なり。者勒篾は、何故に媛と號したるか、知らず。）後方に殿をな〜、斥候を放ちて動きて、かく動けるに依り、翌日の日の內に日傾ける頃、合剌合勒只惕額列惕に到りて憩はんと下馬せり。（この額列惕卽ち沙漠は、名高き戰場なれども、その處は確ならず。親征錄）合蘭只之野、（また合蘭眞沙陀。元史本紀哈闌眞沙陀、畏荅兒の傳哈剌眞、亦赤台の

傳なる哈剌哈眞沙陀は、地名を誤りて人名とせり。）憩ひて居る時、阿勒赤歹（成吉思汗の弟合赤溫の子、元史世系表の濟南王按只吉歹）の騸馬どもを野飼せ〜めたる赤吉歹、牙的兒は、（親征錄）太出、也迭兒、（別咧津譯集史）泰出勤黑歹、牙都兒。（洪鈞は「秘史奪」泰字音、親征錄奪「吉歹音」と云へり。）路路青草に騸馬どもを野飼〜つゝ行く時、後より卯溫都兒の前に依り忽剌安不嚕合惕を（赤き榆林。親征錄）忽剌阿卜魯哈（誤りて二山の名とせり。）過ぎ來る敵の塵を見て、「敵到れり」と云ひて、騸馬どもを趕ひて來て、「成吉思合罕は」「敵到れり」と言はれて、見れば、卯溫都兒の前に依り、紅き榆林を過ぎ、塵を上げて、王罕かく襲ひて來るなり」と云ひて（云はれて）、そこより成吉思合罕は、塵を見ると、騸馬どもを拏へ〜

兩軍の力を較べたる王罕札木合の問答

めて、馱〜て上馬せり。かく見ざりせば、不意「打」なりけん。その來る時、札木合は、王罕と共に來合ひて來るなりき。そこに王罕は、札木合に問ひき。「帖木眞子の處に、善く戰ふ程のもの、誰かある」と問ひき。札木合言はく「そこに兀嚕兀惕、忙忽惕とて彼の民あり。彼のその民は善く戰へるぞ。轉ずる（脫斡里帙）度毎に陣勢（脫宜）好くあり。旋る（迭列勒古）度毎に次序（點）好くあり。小きより（兀出干）環刀（兀勒都）鎗の裏に慣れたる民。彼等は、黑色花色の纛どもあり。彼等は、用心すべき民なるぞ」と云ひき。その言につき王罕言はく「かくあらば、我等は、彼等を只兒斤（親征錄元史）朱力斤部）の勇士どもに合荅黑

に任せ、只兒斤の勇士どもに衝かせん。只兒斤の後援には、土綿土別干の阿赤黑失嗀（親征錄 阿赤失蘭）に衝かせん。土別干の後援には、斡欒董合亦惕（親征錄 董哀部）の勇士どもに衝かせん。董合亦惕の後援には、王罕の千の侍衛を率ゐる豁哩失列門太石（親征錄 火力失烈門大石、元史は誤りて火力失烈門部）衝け。千の侍衛の後援には、我等大中軍にて衝かんぞ」と云ひき。又王罕言はく「札木合弟、我等の軍を汝整へよ」と云ひき。その言につき、札木合別に離れて出でて、その從者に言へらく「王罕は、この軍を我に整へよと云へり。安荅には我敵すること能はず行きたるに、この軍を

成吉思汗に密告する札木合の武心

我に整へよと云へり。王罕は、越えて我より彼方に在りき（我よりも劣れり）。酌中の伴なり。（酌中の蒙語、解り得ず。姑く明譯に從へり。）察黑圖安荅に報告を入れん。安荅、戒慎せよ」と云ひて、札木合は、陰に成吉思合罕に報告を入れて言ひて遣るには「王罕は、我に問へり。「帖木眞子の處に、善く戰ふ程のもの、誰かある」と問ひたれば、我言はく「兀嚕兀惕忙忽惕を頭とす」と言へり、我。我が言にて、彼等は、只兒斤を頭とゝして、先鋒とゝ整へ合へり。只兒斤の後援には、土綿土別干の阿赤黑失嗀をと云ひ合へり。「土別干の後援には、斡欒董合亦惕の勇士どもをと云ひ合へり。」董合亦惕の後援には、

王罕の千の侍衛の官人豁哩失列門太石をと云ひ合へり。彼の後援には、その王罕の大中軍の軍にて立たんと云ひ合へり。又王罕言はく「札木合弟、この軍を汝整へよ」とて、我に委ねんと言へり。これにて見れば、酌中の伴なり。軍を整へ合ふことは何ぞ能くせん。前に我は安荅に敵すること能はず〜て行きたるに、王罕は、我より彼方に在りき。安荅勿恐れそ。戒慎せよ」と云ひて遣りき。

合剌合勒只惕の戰

この傳言に來らるゝと、成吉思合罕言はく「兀嚕兀惕の主兒扯歹伯父、（成吉思汗の同族にて、孛兒只斤氏の長者なるが故に尊びて伯父と云へり。）汝何と云ふらん。汝を先鋒とせん」と云へり。主兒扯歹の聲出す前に、忙忽惕の忽亦勒荅兒薛禪（卷四の忽余勒荅兒。薛禪は、成吉思汗より賜はれる號なり。元史畏荅兒の傳に見ゆ。）言はく「安荅の前に我戰はん。この後我が孤子どもを養はんことを安荅知〜めせ」と云へり。（成吉思汗の忽亦勒荅兒と約〜て安荅となれること、畏荅兒の傳に見ゆ。）主兒扯歹言はく「成吉思合罕の前に、我等兀嚕兀惕、忙忽惕、先鋒と〜て戰はん」と云ひき。かく云ひて、主兒扯歹、忽亦勒荅兒二人、兀嚕兀惕、忙忽惕を率ゐ、成吉思合罕の前に整へて立ちたり。立ちたれば、敵は、只兒斤を先鋒と〜て到りて來ぬ。來ぬれば、兀嚕兀惕、忙忽惕、迎へ衝きて只兒斤を敗れり。敗りて往く時、土綿土別干の阿赤黑失喻

衝きたり。衝きて、阿赤黑失喻は、忽亦勒荅兒を刺〳〵て落〳〵き。忙忽惕どもは、忽亦勒荅兒の上に翻りき。主兒扯歹は、兀嚕兀惕にて衝きて、土綿土別干を敗れり。敗りて動かゝめて往く時、斡欒董合亦惕迎へ衝きたり。主兒扯歹は、又董合亦惕を敗れり。敗りて往く時、豁哩失列門太石、千の侍衛にて衝きたり。主兒扯歹、又豁哩失列門太石を退かゝめて敗りて往く時、王罕に相談も無く、桑昆は迎へ衝かんとし、赤き腮を射られて、桑昆すぐ其處に倒れき。桑昆を倒されて、客咧亦惕都てにて桑昆の上に翻りて立ちたり。彼等を敗りて、落つる日丘の上に拍ちつゝあ

桑昆の負傷

る時、[主兒扯歹は、]我等の軍に翻りて、忽亦勒荅兒を、倒れたる傷あるを伴れ回りて、成吉思合罕は、我等の軍[を收めて、]王罕より戰へる地より離れて、夕に動きて離れ宿れり。

大戰の翌朝の點視

立ちて宿りて、日明けさせ點視すれば、斡闊歹、(元史本紀に太宗英文皇帝、諱は窩闊台、太祖の第三子なり。)孛囉忽勒、孛斡兒出三人無かりき。成吉思合罕言はく[斡闊歹と共に賴るべき孛斡兒出、孛囉忽勒二人後に殘りき。生きても死にても何ぞ離れん、彼等]と云へり。我等の軍は、夜その騸馬を執りて宿りて、成吉思合罕言はく[我等の後より襲ひて來ば、戰はん]とて、整へ

て立ちたり。日明るくならせて見れば、後より一人の人來。到りて來れば、孛斡兒出なりき。孛斡兒出に到りて來らるゝと、成吉思合罕言はく「長生の上帝知〜めせ」と云ひて、その胷を椎ちたり。孛斡兒出言はく「衝く時、馬を倒るべく射られて、歩み走りて行く時、その客咧亦惕どもが桑昆の上に翻り立てる鬪ひの隙に、荷ある馬その荷を歪めて立ち居るを、その荷を斷ちて、その單鞍に乘りて出でて、我等の離れ出でたる路踏み行きて、得てかく來ぬ、我」と云へり。

孛斡兒出の後れ到り

又暫くありて、又一人の人來。到りて來る時、彼の下に脚を垂れて來。見れば、獨の人の如くあり。來畢れば、斡闊歹の後より孛囉忽勒疊騎〜(尻馬に乘り)て、口の脇にて血を流〜て到りて來ぬ。斡闊歹は、頸脈に箭を中てられて、その血凝りたるを、孛囉忽勒口にて吮ひて、塞れる血を脇にて流〜て來ぬ。成吉思合罕見て、眼より涙を流〜て、心腦み、火にて疾く燒かせ、熱を透らすると斡闊歹に飲物(明譯止渴的物)を尋ねさせて與へさせて、「敵來ば、戰はん」と云ひて居りき。孛囉忽勒言はく「敵の塵は、彼方に卯溫都兒の前に依り、忽剌安孛嚕合惕(前の忽剌安不嚕合惕)の方に塵長く出でて、彼方に去りたり」と云へり。孛囉忽勒

斡闊歹孛囉忽勒の後れ到り

のその言につき、[成吉思合罕は]「來ば戰ふべきなりき。敵に逃げ動かれば、我等は、軍を整へて[後に]戰はんぞ」と云ひて動きたり。動くに、兀勒灰失魯格勒只惕河に泝り動きて、荅闌捏木兒格思に入りたり。(この河は、前に云へるが如く南に流るゝ河なれば、泝るとは、南より北に還るを云ふ。然らば合剌合勒只惕にて敵に追ひ附かれて起れるこの名高き合戰は、その河の下流、即ち塔塔兒四部の奥魯の在りし處、即ち今の烏珠穆沁左翼の地にて起れるなり。この古戰場を尋ねんと欲する人は、その地方にて求むべし。)

合荅安荅勒都兒罕の報告

そこに後より合荅安荅勒都兒罕は、妻子より離れ來ぬ。(この人は、卷四に見えたる如く、既に成吉思汗に降りたりしが、今度の變に妻子と共に王罕に降り若しくは虜へられて、今逃げ回りたるなり。)來て、合荅安荅勒都兒罕は、王罕の言として言はく「王罕は、その子桑昆を兀出馬(箭の一種の名)にて赤き腮を倒るべく射られ

て、彼の上に翻りて、そこに言ひき。「惹く(音咎合惕忽)べからざるに惹きたり。闘ふべからざるに闘ひとなり、可惜(合亦剌)我が子の腮に釘を釘打たゝめたり。子の命を失ふまで衝き戰はん(合察兒 合荅阿孫 合荅兀勒 明譯)就我兒子性命有時、可再教衝(合勒忽)」と云へば、その時阿赤黑失喻言はく「罕、罕、止めよ。背處に在る子(生れざる子)を求むるに、祈り願ひをなゝして、阿備巴備(得ず 譯)とて求め願ひたり、我等。この生れ畢へたる子桑昆を介抱せん(明譯)未生兒子時、禱祈著要子嗣。將這既生了的兒子桑昆擡舉)。忙豁勒の多數は、札木合と共に、阿勒壇、忽察兒と共に、我等の處に在り。帖木眞と共に背きて出でたる忙豁勒は、

何處に去らん、彼等。馬に乘りきりにて、木に蔽はるゝことに爲りぬ、彼等(明譯)毎人止騎著一匹馬、夜裏必在樹木下宿)。彼等を、來ずば、往きて馬の乾糞の如く包みて持ち來んぞ、我等は彼等を」と云へり。阿赤黑失喻の此の言につき王罕言はく「然り。さあらば、子艱むらん。子を動かさず介抱せよ」と云ひて、戰へる地より回り退けり」と云へり。

合勒合河の行軍

其處より成吉思合罕は、荅闌捏木兒格思より合勒合河(今の車臣汗部東邊の喀爾喀河)に沿ひ動くに、數(人數)を數へ合へり。數へ合へれば、二千六百となれり。一千三百は、成吉思合罕「率ぬて」、合勒合河の西の邊に依り起ちぬ。一千三百は、合勒合河の東の邊に依り、兀嚕兀惕、忙忽惕(親征錄)兀魯吾、忙兀二部)「率ぬて」起ちぬ。かく起ちて來る時、行糧(野獸)を圍獵つゝ行く時、忽亦勒荅兒は、その創痍えざるに、成吉思合罕止むれども肯かず、獸を衝きたれば、再發〳〵て歿りぬ。そこに成吉思合罕は、合勒合河の斡兒訥兀山(親征錄)斡兒努兀)の半崖(蒙語客勒帖該合勒都惕(親征錄)遣忒哥山岡)に彼の骸を放た(葬ら)〳〵めたり。

忽亦勒荅兒の死

帖兒格阿箑勒等の降附

合勒合河の不余兒納兀兒(親征錄)盃而之澤)に注ぐ源(湖水の頭)に、帖兒格阿箑勒(卷四の迭兒格克額箑勒、親征錄帖木哥阿蠻、また溺兒斤)等の翁吉喇惕あ

りと知りて、主兒扯歹を兀嚕兀惕を領て遣りぬ。遣るに[翁吉喇惕の民は、前の日より女甥の姿にて、息女の顔色にて]と云はば、和するぞ。彼等は、彼等(我等)の敵と云はば、戰ふぞ、我等(明譯翁吉喇百姓毎、想著在前姻親呵、投降來者。若不肯投降呵、便厮殺者)と云ひて遣りたれば、主兒扯歹に降り入りき。降り入られて、成吉思合罕は、彼等の何をも動かさざりき。

統格小河の駐營

そこに翁吉喇惕を降らゝむると、往きて統格豁囉罕の(統格小河。卷一の統格黎克小河とは異なり。明譯文は誤りて統格黎小河と譯せり。親征錄董哥澤脫兒合火兒合。蓋哥澤は、統格納兀兒にて、脫兒合火兒合は、統格豁囉罕の訛なり。蓋この小河は、湖と接して、湖と名同じきなり。今因果荅河に入る小河に唐噶河あり、巴勒主納湖に近し。)

王罕の背信を責むる成吉思汗の二使

東に下馬ゝて、阿兒孩合撒兒(親征錄元史阿里海)、速格該者溫(卷三の速客該者溫)二人に傳言せさするには「統格小河の東に下馬せり、[我等]」それの草も好くなりき。我等の騸馬ども肥えたり。我が罕額亦格(罕なる父)に言へ」とて言はく「我が罕額赤格。何の怒にて我を恐れさせたる、爾。恐れさするならば、惡ゝき子ども惡ゝき婦どもを安眠せさせて何ぞ恐れさせざる、爾。坐れる床を低げさせて、上り出づる煙(丁撒兀惕迭額克石)を散らゝて、何ぞかく恐れさせたる、爾。(親征錄)與其驚畏我、何不使我衆煬爨而息、安榻而臥、使我癡子癡婦得寧寢乎。)我が罕額赤格。傍の人に刺されたらん、爾。横の人(合勒只兒忽合惕忽黑荅款迭列部)

忽剌安忽惕の盟

に驚かされたらん、爾。我が罕額赤格。我等二人は、何とか云ひ合ひたりし。勻兒合勒渾山（可乞兀勒迭 親征錄）卓兒完忽奴之山）の忽剌阿訥兀惕（卷五の忽剌安忽惕）孛勒荅兀惕（孤山なる孛勒荅黑の複稱。親征錄）忽剌河班荅兀）にて、我等言ひ合はざりゝか。「牙（迷都）ある蛇に唆（雪都兒帖）されば、彼の唆ゝに勿入りそ。牙（迷都額兒）にて口にて證ゝ合ひて信ぜん」と云ひ合はざりゝか。今我が罕額赤格は、牙にて口にてやは證ゝ合ひて離れたる、爾。「大牙（阿喇阿）ある蛇に離閒（阿荅兒塔）せられば、彼の離閒（阿荅兒罕）に勿入りそ。口（阿馬阿兒）にて舌にて證ゝ合ひて信ぜん」と云ひ合はざりゝか。今我が罕額赤格は、口（阿馬阿兒）にて舌にてやは證ゝ合ひて分（吳吉赤喇）れたる、爾。我が罕額赤格。

轅と輪との譬

叔父に王罕の逐はれたる時の也速該の救ひ

我は、少ゝもあれば、多きを求めさせざりき。惡ゝきもあれば、善きを求めさせざりき、我。二の轅ある車、その第二の轅を折らば、それの牛拽くこと能はざらん。其の如き爾の第二の轅にて我はあらざりゝか。二の輪ある車、その第二の輪を折らば、起つこと能はざらん。其の如き爾の第二の輪にて我はあらざりゝか。前の日を云へば、忽兒察忽思不亦嚕黑罕額赤格（親征錄）忽兒札忽思盃祿可汗）の後、四十人の子どもの兄と云ひて罕となりゝぞ、爾。罕となり畢へて、その弟どもを台帖木兒大石、不花帖木兒（親征錄、太帖木兒不花帖木兒）二人を殺ゝたるぞ、爾。額兒客合喇なる

爾の弟殺されんとし、命を助かりて出でて、乃蠻の亦難察必勒格罕（卷五の亦難赤罕）の處に逃れて入り〳〵ぞ。「弟どもを殺〳〵好きになれり」と云ひて、古兒罕（親征錄菊律可汗、元史菊兒）なる爾の叔父は、爾の處に出馬〳〵て來つれば、爾は百人にて命を助かり逃れて、薛涼格河に沿ひ走りて、合喇溫合卜察勒（親征錄哈剌溫之隘）に鑽り入りたるぞ、爾。さてそこより出づるに、箋兒乞惕の脫黑脫阿に忽札兀兒兀眞なる息女を顏にて與へて、合剌溫合卜察勒より出でて、也速該罕なる我が父の處に來つれば、爾そこに言へらく「古兒罕叔父より我が部衆を救ひて與へよ」と云はれて、也速該罕なる我が父は、爾にかくとて來られて、泰赤兀惕より、忽難、巴合只（親征錄泰赤兀都兒吾難、巴哈只。都兒は、敦の誤りなり。泰赤兀敦は、泰赤兀惕のなり。この誤りは、修正秘史に本づきたりと見えて、喇失惕の集史も、兀都兒を人の名とせり。）二人を率ゐて、爾の部衆を救ひて與へんとて、軍を整へて往きて、忽兒班帖列速惕（卷五の帖兒速惕、親征錄塔剌速野）に居る古兒罕を二十三十の人を合申に（親征錄元史河西、蒙語合申は、漢語河西の轉なり。）逐ひて、爾の部衆を救ひて與へたるぞ。そこより來て、禿兀剌河の黑林に、我が罕額赤格は、也速該罕と安荅になり合ひて、そこに王罕なる我が父は感謝みて言はく「爾のこの恩の報いを爾の子孫の子孫に報い回さんことを皇天

也速該と安荅になれる王罕の感謝

困窮せる王罕に對する成吉思汗の厚遇

后土の祐護にて知〜めせ」とて感謝みて居り〜ぞ、爾。その後額兒格合喇（前の額兒客合喇）は、乃蠻の亦難察必勒格罕より軍を索めて、爾の處に出馬〜て來つれば、爾は命を助かり、部衆を棄てて、少き人にて走りて出でて、合喇乞荅惕の古兒罕の處に垂河に撒兒荅兀勒の地に往きたるぞ、爾。一年を盡さず、又古兒罕より背きて出でて、委兀惕、唐兀惕の地に由り困窮〜て來るに、五匹の粘灘を拘へて乳を擠りて喫みて、駱駝の血を刺〜て喫みて、偏盲の黑蠶の黃馬（蒙語合里溫抹鄭、明旁譯黑鬃尾黃馬、文譯沙馬、高寶銓曰く「西北域記曰「狐毛短而黯者、曰沙狐」黯、音天、黃白色、沙馬、蓋毛色黃白者）にて來ぬるぞ、爾。罕額赤格の爾を、かく困窮

木魯徹薛兀勒の戰

〜て來ぬと知りて、先に也速該罕なる我が父と安荅と云ひ合ひたる故と思ひて、塔孩、速客該二人を爾の迎へに使に遣りて、又我自ら客魯涅河の不兒吉岸より迎へ往きて、古薛兀兒の湖（親征錄曲笑兒澤）に遇ひ合ひたるぞ、我等。爾を困窮〜て來ぬと云ひ、科斂を斂めて爾に與へて、先に我が父と安荅と云ひ合ひたる緣故にて、土兀剌河の黑林にて我等二人の父子と云ひ合へる緣故は、かくあらずや。その冬爾を團營の內に入れて養ひたるぞ。冬冬籠り〜て夏過〜て、その秋篾兒乞惕の民の脫黑脫阿別乞の處に出馬〜て、合廸黑里黑你嚕溫

兩汗の乃蠻征伐

（合廸黑里黑の嶺。親征錄）哈丁黑山、（元史哈丁里）の木魯徹薛兀勒（親征錄元史）莫那察山、（親征錄また木奴又力之野、額兒忒曼木里察克速兒）に戰ひて、脫黑脫阿別乞を巴兒忽眞脫古木に逐ひて、箋兒乞惕の民を虜へて、彼等のあまたの馬羣宮室彼等の田禾都てを取りて、罕額赤格に與へたるぞ、我。爾の飢ゑたるを日の晝に至ら〜めざり〜ぞ。爾の瘦せたるを月の半に至ら〜めざり〜ぞ、我。（親征錄）使汝饑不過日午、羸不過月望。）又我等は、古出古兒台（卷五の古出古惕、乃蠻の分部の名）不亦嚕黑罕を兀魯黑塔黑の莎豁黑兀孫（莎豁黑の水、卷五の鎖裕黑兀孫）より阿勒台山を越え〜め追ひて、兀嚨古河に沿ひ往きて、乞赤勒巴石納兀兒（乞赤勒巴石の湖、卷五の乞失勒巴失納兀兒）に窮めて

可克薛兀撒卜喇黑の追襲

取り〜ぞ、我等。そこより回りて來る時、乃蠻の闊克薛兀撒卜喇黑（親征錄）曲薛吾撒八剌）、拜荅喇黑別勒赤兒（拜荅喇黑の河股）に軍を整へて對陣〜たる時、夕暮になられて、明日の朝戰はんとて、整へ合ひて宿れば、我が罕額赤格、爾は、その陣處に火を燒かせて、夜合喇薛兀勒河に泝りて動きたるぞ、爾。明日の朝見れば、その陣處に無く爲られ、爾に動かれて、「此等は、我等を燒飯と〜けり」と云ひて、我も動きて、額迭兒阿勒台の汭にて渡りて來て、撒阿里客額兒に下馬〜たるぞ。そこに爾を可克薛兀撒卜喇黑は襲ひて、桑昆の妻子人民住具都てを取り、罕額赤格の爾

四傑の救ひ

の帖列格禿阿馬撒兒（帖列格禿の口）にある一半の人民馬羣糧食を虜へて去れば、箋兒乞惕（親征錄茂力乞滅里乞元史茂里乞部）の脫黑脫阿（親征錄脫脫）の子、忽都（卷五の忽圖）、赤剌溫（親征錄火都赤剌溫）二人、その人民住具と共に爾の處にあるが、その戰の中に、その父に合はんと、巴兒忽眞に入らんと、爾の處より背きて動き〳〵ぞ。そこに我が罕額赤格、爾は、「乃蠻の可克薛兀撒卜喇黑に人民住具を虜へられたり、我。我が子、朶兒邊曲魯兀惕（四傑）を與へて來よ」と云ひて來つれば、爾の如くは思はず、そこに我は、孛斡兒出、木合里、孛囉忽勒、赤剌溫巴阿禿兒、この四傑を軍を整へて遣りたれば、我がこの四傑

講和の望み

の先に、忽剌安忽惕にて桑昆は對陣となり、その馬腿を射られて捕へられんとゝて居る處へ、我がこの四傑到りて、桑昆を救ひ、妻子人民を住具ごめに都てを救ひて與へたれば、そこに我が罕額赤格は、感謝みて言はく「子なる帖木眞に去り畢へたる人民住具を四傑をおこせて救ひて與へられたり」と云ひて居りき、爾。今我が罕額赤格は、いかんぞ我を怒りに怒れる、爾。怒る理由の（理由を明さん）爲に使をおこせよ。おこするには、忽巴哩忽哩亦都兒堅二人をおこせよ。二人をおこせずば、第二（第二の人亦都兒堅）をおこせよ」と云ひて遣りたれば、（親征錄に「可遣案敦阿速、渾八力二人來報否則遣一人」とあり。この

二人は、卷五の阿勒屯阿倏黑、忽勒巴哩に〜て、喇失惕も親征錄に同じ。忽勒巴哩は忽巴哩忽哩と名似たるに由り修正祕史の誤れるなるべし。

王罕の悔痛

この言につき、王罕言はく「嗚呼息苦〜き[かな](語蒙唉莎亦魯黑)。我が子より、離るゝ道理よりやは離れたる。分るゝ關係よりやは分れたる、我」と云ひ、心艱みて言はく「今子を見て惡〜く思はば、かくの如く血を出されん(殺さんれ)」と誓ひて、小指を彈き、箭削る小刀にて刺〜て血を流〜て、小き樺桶に盛りて、「我が子に與へよ」と云ひて遣りぬ。(樺桶は、樺の皮の小桶なり。柳邊紀略に曰く「樺木、徧山皆是、類白楊、春夏間剝其皮、入汗泥中、謂之糟、糟數日、出而曝之地、白而成花形者、爲貴、金史所謂醫瓣也」黑龍江外記に曰く「山谷多樺木、土人以爲箭笴、爲鞍版、爲刀柄、皮以貼弓、爲車蓋、爲窰廩、爲札哈」(原注小船也)縫之如栲栳、大擔水、小盛米麪、謂之樺皮斗、俄羅斯亦有之、極小雕鏤精巧、宜儲檳榔鼻煙、號老光斗)

札木合に對する嘲り

又成吉思合罕は、「札木合安荅に言へ」とて言はく「我が罕額赤格より見ゆる能はず〜て離れ〜めたり、汝。(明譯補塡)在前時毎日、(二人幼く〜て始めて安荅となれる頃の事なるべし)我等の先に起きたるは、罕額赤格の青鍾を[以て馬乳を]飲みたりき。我に先に起きて飲まるゝを妒みたるぞ、汝。今罕額赤格の青鍾を飲み乾〜、幾ばくを費すか、汝等」と云ひて遣りぬ。又成吉思合罕は、「阿勒壇、忽察兒(親征錄元史)案彈、火察兒)二人に言へ」とて言はく「汝等二人、我を棄てて、面をや撇てんと云へる、汝等。行をや撇てんと云へる、汝等。(面をすつるは、體を辱むるを云ひ、行をすつるは、事業を壞るを云ふ。親征錄)汝二人欲殺我、將棄之乎、瘞之乎。(洪鈞の重譯には「汝二人惡我、將

阿勒壇忽察兒の背信を責むる痛切の言

仍酉我地上乎、抑埋我地下乎」とあり。）忽察兒を汝を「捏坤太石（親征錄捏羣太石、元史瓜坤）の子」と云ひて、我等より「汝、罕と爲れ」と云へば、爲らざりゝぞ、汝。阿勒壇を汝を「忽禿剌罕こそは、「國を」管き行きけれ。その父管き居たるに依り、汝罕と爲れ」と云へば、亦爲らざりゝぞ、汝。上より（長房より數へての意なり。明譯在上羅。親征錄にも上羅とあり。）「巴兒壇巴阿禿兒の子（壇は、合黑の誤りにして、卽ち合不勒罕の長子斡勤巴兒合黑なり。これは、原本の初より誤りて、修正祕史も、その誤りを承けたりと見えて、喇失惕の集史も、これに同じ。親征錄は、その誤りを覺りけん。）八兒合拔都と改め、元史は、それに據りて、我伯祖八剌哈と書けり。八兒合も八剌哈も、卽ち斡勤巴兒合黑なり。また子は、孫に作るべし。但し孫をも子と云へるかも知れず。元史は、八剌哈之奇と書けり。）」と云ひて、撒察、台出（親征錄元史薛徹、大丑）二人を「汝等、合惕（罕の復稱）と爲れ」と云ひて、能はざりゝぞ、我。汝等を「合惕

となれ」と云ひて能はずゝて、汝等に「汝、罕となれ」と云はれて、管き行きたるぞ、我。汝等合惕となりたるならば、多き敵（斡勒）に先鋒（阿勒斤赤）に走らせられば、上帝に祐護せられば、敵（答亦）の人を虜ふる時、腮美ゝき少女、妃婦人を、臂節（合見合）好き騾（答兀里）馬を取り來て與ふるなりゝぞ、我。野の獸に先驅せさせられば、崖（合答）の獸は、その前脚（合見）を一竝に寄せて與ふるなりゝぞ、我。懸崖（昆）の獸は、その後脚（忽牙）を一竝に寄せて與ふるなりゝぞ、我。曠野（客額兒）の獸は、その腹（客額里）を一竝に寄せて與ふるなりゝぞ、我。（親征錄に「假汝等爲君、吾當前鋒、俘獲輜重、亦歸汝也」とあり。「汝等合惕となり」以下の語の意を約めて書きたるなり。）今我が罕額赤格に善さに伴と

金帝の察兀惕忽哩

なりて與へよ。厭き易〜と云はれんぞ、汝等。察兀惕忽哩（卷四の札兀惕忽哩）の扶植のみなりきと勿云はれそ。（明譯）您如今卻離了我、在王罕處。您好生做伴著、休要有始無終、教人議論你每、全倚仗著帖木眞、無帖木眞呵、便不中用了。（成吉思汗）

蒙古の興れる三河の源

三河（斡難、客魯嗹、土兀剌）の源は、誰にも勿下營せ〜めそ」と云ひて遣りぬ。（親征錄に「三河之源、我祖實興、毋令他人居之、汝若事吾父汪可汗、勿使疑汝、爲察兀忽魯之族而累汝。卽汪可汗交人易厭、於我尙爾、況汝輩乎。縱然今夏、豈能到來冬矣」とあり。察兀忽魯の事は、祕史と意違ひ、又二人の厭き易きことを王罕の事に移せり。元史には「三河、祖宗肇基之地、毋爲他人所有。汝善事汪罕。汪罕性無常、遇我尙如此、況汝輩乎、我今去矣。我今去矣」と云ひて、文は麗〜くなりたれども、意味は全く親征錄に因れり。「我今去らん」の二語は、進むことか、退くことか、面白き樣にて、面白からず、蛇足なり。）

脫斡哩勒を弟と云へる緣故

又成吉思合罕は「脫斡哩勒（親征錄脫憐）なる弟に言へ」と言〜「弟と云へる緣故は、屯必乃、察剌孩領忽（親征錄察剌合令忽、統必乃）二人の斡黑荅（親征錄塔塔）奴に依り起りて來〜ぞ。斡黑荅奴の子速別該（親征錄雪也哥）奴ありき。速別該奴の子闊闊出乞兒撒安（親征錄闊闊出黑兒思安）ありき。闊闊出乞兒撒安の子也該晃塔合兒ありき。（親征錄折該晃脫合兒。蓋卷三の者該晃荅齡兒に同じ。然らば脫斡哩勒は、速格該者溫と兄弟に〜て、速客虔氏なり。）也該晃塔合兒の子脫斡哩勒、汝。誰が部衆を「王罕に」與へんとて諂ひ行ける、汝。我が部衆は、阿勒壇、忽察兒二人、誰にも管か〜めぬぞ。汝を弟と云へる緣故は、我が高祖父（字兒孩）（屯必乃）の戶限（字沙合）の奴（字斡勒）、我

が曾祖父（合不勒罕額鄰出克）の門の近習の奴［なり〜に由る］と我が云ひて遣ること、かくあり。」

桑昆の不孝を誡むる安荅の忠言

又成吉思合罕は「桑昆安荅（親征錄鮮昆案荅）に言へ」とて言はく「衣服ありて生れたる子にて我はあり〜ぞ。裸にて生れたる子にて汝はあり〜ぞ。我等の罕額赤格は、我等二人を齊等に養ひたりき。閑に入らるゝより、桑昆安荅は、我を嫉みて逐ひたるぞ、汝。今我等の罕額赤格の心を艱まさず、夕に朝に入りて出でて慰めて行け。舊の心（明譯你舊嫉妒的心）を放たず、罕額赤格を、命ある内に罕とならんとて、我等の罕額赤格の心を艱ま

〜て勿苦まし〜めそ」と云ひて、「桑昆安荅、我に使をおこせ來るには、必勒格別乞、脫朶延（親征錄必力哥別吉、脫端）なる二人の從士をおこせよ」と云ひて遣りぬ。「我に使來るには、罕額赤格は、二人の使をおこせよ。桑昆安荅も、二人の使をおこせよ。札木合安荅も、二人の使をおこせよ。阿勒壇も、二人の使をおこせよ。忽察兒も、二人の使をおこせよ。阿赤黑失喻も、二人の使をおこせよ。合赤溫（卷五の合赤溫別乞）も、二人の使をおこせよ」とて、阿兒孩合撒兒、速格該者溫二人をもてかゝる言どもを傳言せ〜めて遣りぬ。

七人の使皆二人づゝ

桑昆の寃頑

この言どもをかく言はれて、桑昆言はく「幾たびも罕額

赤格と云ふなりき。殺〜好きの翁とやは云はざりし。我を幾たびも安荅と云ひたりき。脫黑脫阿師巫、撒兒塔黑（撒兒塔兀勒の國）の羊の尾に續きて行けりとやは云はざりし。此にて言どもの計略は、覺られたり。戰はんの首なる言なり。必勒格別乞、脫朶延二人、戰ふ纛を立てよ。騸馬どもを肥やせよ。疑ひ無くあるぞ」と云へり。（脫黑脫阿云云は、當時かゝる師巫ありて、かゝる風をなゝたるなり。委〜き事は、今知るべからず。明譯）我行也幾曾說是安荅來。只說脫黑脫阿師翁續著回回羊尾子行有。（元の世にても已に意味を解りかねたりと見えて、親征錄には彼何營實意待我爲案荅特以玩物視我耳と譯せり。別咧津は剌失惕を譯し、彼は我を安荅と呼べども、又常に我を罵る」と約めて、自注に下に脫忽布惕の一語あり、筴兒乞惕の脫克塔の事ならん。語意解〜難し」と斷れり。）かくて王罕より阿兒孩合撒兒回る時、速格該者溫の妻子は、そこに脫斡哩勒の處に居りき。去る心になりかねて、速格該者溫は、阿兒孩より後れき。阿兒孩來て、この言どもを成吉思合罕に言へり。

速格該の居殘り

巴勒主納湖の駐營

かくて成吉思合罕は、去りて巴勒主納納兀兒に下馬せり。（巴勒主納の湖は、斡難河の北にて、露西亞の咱拜喀勒州なる赤塔の南にあり。禿喇河それより流れ出でて因果塔河に入る。その地は、林木多く〜て駐夏に宜〜く、蒙古人は、今もその地を指〜て、成吉思汗の難を避けたる處なりと云ひ傳ふと云ふ。親征錄は河の名とし、喇失惕は地の名と〜て、そこに小河どもありと云ひ、他の西史は、錄の如く河の名とせり。禿喇河を昔は巴勒主納河と云へるにや。又は別に湖に注ぐ巴勒主納河あり〜かも知れず。親征錄、元史雪不台の傳に班朱尼河とあり。下に委〜く引けり。元史にて湖の名と〜たるは、朮赤台の傳に班眞海子とあるのみなり。）そこに下馬する時、搠斡思察罕（名）豁嚕剌思（姓）、正にそこに遇ひ合へり。それらの豁嚕剌思（親征錄元史）火魯

刺部)は、闘はずに降り來ぬ。汪古惕(親征錄)王孤部(元史汪古部)の阿剌忽失的吉惕忽哩(親征錄)阿剌忽思的乞火里。(元史、阿剌兀思剔吉忽里)の處より阿三撒兒塔黑台(阿三と云ふ撒兒塔黑人)、白き駱駝ある千の羯羊(千の羯羊に白駱駝一匹まゝれる)を趕ひて、額兒古捏河に沿ひ、貂鼠青鼠を買ひて取り來る時、「成吉思合罕に」巴勒主納に水飲みに入る處に遇へり。(この水飲みは、名高き巴勒主納の濁水の誓なり。祕史の文は、簡略なるが故に、參考の爲に、紀傳に見えたる叙事を下に引かん。)

巴勒主納の水飲み卽ち濁水の誓

太祖本紀帝既遣使於汪罕、遂進兵虜弘吉剌別部溺兒斤以行、至班朱泥河。河水方渾。帝飲之以誓衆。有亦乞烈部人孛徒者、爲火魯剌部所敗、因遇帝、與之同盟。哈撒兒別居哈剌渾山、妻子爲汪罕所虜、挾幼子脫虎走、糧絶、探鳥卵

飲渾水卽ち巴勒主惕の諸說

太祖本紀の飲渾水

爲食、來會于河上。時汪罕形勢盛强、帝微弱。勝敗未可知、衆頗危懼。凡與飲河水者、謂之飲渾水、言其曾同艱難也。(この文は、全く親征錄に據りて、只「河水方渾」と「時汪罕」以下の三十七字とを加へたるなり。溺兒斤は、卽ち親征錄前文の帖木哥阿蠻にして、不余兒湖の頭にありと祕史に記せる帖兒格阿篾勒の合勒合河に沿ひ動ける時にあるを、親征錄は重ねてこゝに溺兒斤を虜ふと記せるは、誤りなり。元史は、又前の降附の事をば「怯里亦部人、遂棄汪罕來降」と改めて、溺兒斤を虜へたることは、親征錄のまゝに書けり。されども統格小河より巴勒主納湖に遷るに、何ぞ不余兒湖の邊を過ぐることあるべけんや。)

札八兒火者の傳なる馬くひ

札八兒火者(札八兒火者の傳)太祖與克烈汪罕有隙、一夕汪罕潛兵來。倉卒不爲備、衆軍大潰。太祖遽引去、從行者僅十九人、札八兒與焉。至班朱尼河、餱糧俱盡、荒遠無所得食。會一野馬北來、諸王哈札兒射之殪。遂刳革爲釜、出火于石、汲河水、煮而啖之。太祖舉手仰天而誓曰、

「使我克定大業、當與諸人同甘苦。苟渝此言、有如河水。」

将士莫不感泣。これは、飲渾水の如くも聞ゆれども、水を飲めるに非ず〜て、馬を啖へるなり。濁水の誓に非ず〜て、馬肉の誓なり。然るにこの傳は、誤りだらけにて、信ド難し。札八兒は、西域の族長なるに、西域征伐の十餘年前に蒙古に仕へて克烈征伐の役に加はれるは、已に怪むべく、又居庸關の戰は、者別等紫荊關より入りて居庸の南口を破れるを、札八兒の前導にて居庸の間道より軍を進めたりと〜たるなど、疑は〜きこと多ければ、馬肉の誓もいかゞあるべき。

朮赤台の傳なる班眞海子

朮赤台の傳

從征怯列亦、自罕哈啓行、歷班眞海子、閉關萬里、毎遇戰陳、必爲先鋒。罕哈は、合勒合河より巴勒主納湖に至れるを開關萬里と云へるは、形容に過ぎたり。この傳にも誤り多し。合剌合勒只惕の戰を叙べて、「怯列亦哈剌哈眞沙陀等、帥衆來侵」と書き出し、沙漠の名を人の名と〜たるは、最も笑ふべし。「單騎陷陳、射殺鮮昆」と書きたれども、單騎には非ず、兀嚕兀惕を率ゐたり。射殺には非ず、腮を傷けたるのみなり。客列亦惕の亡人なる札哈堅普を乃蠻の主と〜たるは、太祖本紀の札阿紺孛なるを知らざるに似たり。

速不台の傳なる班朱尼河

速不台の傳

太祖在班朱尼河時、哈班嘗驅羣羊以進、遇盜被執。忽魯渾與速不台繼至、以槍刺之。人馬皆倒、餘黨逸去。遂免父難、羊得達於行在所。この事の後に、闊赤榲山の戰、赤は亦の誤りにて、即ち闊亦田の戰あれば、この事は、成吉思汗の巴勒主納に到り〜時には非ず〜て、客魯嗹の上流なる不兒吉岸又は古咧勒古に居たる時の事なるべし。速不台の傳の複出なる雪不台の傳にもこの事を載せて、

鎮海の傳

哈散納の傳

阿朮魯の傳

太祖初建興都于班朱泥河、今龍居河也と云へり。泰定帝紀に「癸巳、即皇帝位於龍居河」とありて、その大赦の詔に「九月初四日、於成吉思皇帝的大斡耳朵裏大位次裏坐了也」と云へれば、泰定即位の處は、客魯嗹河の闊迭額洲の大斡兒朶なるべく、龍居河は、金史完顏奴申の傳なる龍駒河、長春の西遊記の陸局河に〜て、即客魯嗹河なり。然らば班朱尼も班朱泥も客魯嗹の誤りに〜て、興都とは客魯嗹河の上流なる成吉思汗駐營の地を稱したるなり。

鎮海の傳

哈散納の傳

初以軍伍長、從太祖、同飲班朱尼河水。

阿朮魯の傳

烈亦氏。太祖時、從征王罕有功。命同飲班朱尼河之水、且曰「與我共飲此水者、世爲我用。」

阿朮魯、蒙古氏。太祖時、命同飲班朱尼河之水、扈駕親征有功。阿朮魯の孫なる懷都の傳にも

紹古兒の傳

懷都、斡魯納台氏。祖父阿朮魯、與太祖同飲黑河水、屢從征討。とあり。斡魯納台は、祕史の斡羅納兒氏なり。阿朮魯の傳に蒙古氏とあるは、蒙古斡魯納台氏と云ふべきを脱したるなり。黑河は河の名に非ず、水の濁れるを云へるなり。〻紹古兒の傳紹古兒、麥里吉台氏。事太祖、命同飲班朱尼河之水、扈從親征。麥里吉台は、篾兒乞惕氏なり。〻速哥の傳二つあり。卷の百卅四なる速哥、蒙古性烈氏、世傳李唐外族。父懷都、事太祖、嘗從飲班朮居河水。居は、尼の誤りなり。〻土土哈の傳世祖巡幸北邊、召見慰諭之曰「昔太祖與其臣同患難者、飲班朮河之水、以記功。今日之事、何愧昔人。卿其勉之。」班朮の下尼の字脱ちたり。〻阿塔海の傳阿塔海、遜都思人。祖塔海拔都兒、驍勇善戰、嘗從太祖同飲黑河水、以功爲千戶。阿塔海は、日本に寇して遁げ還りたる大將なり。遜都思は、祕史の速勒都思氏、塔海拔都兒は、祕史の塔孩巴阿禿兒なり。〻麥里の傳麥里、徹

土土哈の傳

土土哈の傳なる水飲みの舊事

阿塔海の傳

阿塔海の傳なる祖塔海拔都兒

麥里の傳

麥里の傳なる祖雪里堅

那顏

耶律阿海禿花兒弟の傳

喇失惕額丁の巴兒主惕

兀臺氏。祖雪里堅那顏、從太祖、與王罕戰、同飲班眞河水、以功授千戶。兀朮赤台の傳なる班眞海子は、巴勒主納納兒、この班眞河は、巴勒主納木哷なり。〻耶律禿花の傳耶律禿花、契丹人。世居桓州、太祖時、率衆來歸。大軍入金境、爲嚮導、獲所牧馬甚衆。後侍太祖、同飲班朮河水。濁水の誓は、金に打ち入るより前にあれば、後と云へるは誤れり。又禿花の兄なる阿海の傳には耶律阿海、遼之故族也。云云。歲壬戌、王可汗叛、盟、謀襲太祖。太祖與宗親大臣同休戚者、飲辨屯河水、爲盟、阿海兄弟皆預焉。辨屯も、巴勒主納の訛なり。〻喇失惕額丁を洪鈞の重譯せるには汪罕軍勢仍盛。帝見不敵、亟引退。退後、部衆渙散。帝乃避往巴勒渚納。是地有數小河、而是時水涸流濁、僅可飲渾水。帝慷慨酌水、與從者誓。當日從者無多、稱

之曰巴兒渚特、延賞及後世焉。巴勒主惕は、巴勒主納の語尾を變へて複稱の詞とし、巴勒主納の水飲みに預れる人人の稱とせるなり、元史に飲渾水と書きたるも、巴勒主惕を義譯〜たるなり。喇失惕のこの叙事は、祕史よりも親征錄よりも委し。されどもその文に據れば、合剌合勒只惕の戰の後、統格湖に往く前に、直ちに巴勒主納に往きて、濁水を飲み、それより合勒合河に(沿ひ下る代りに)泝り、帖兒格阿篤勒を降し、統格湖に駐まりて、使を遣り、二たび巴勒主納に往きたりとなゝて、地勢時情皆合はず。巴勒主納の水飲みは、使を遣りたる後にあることは、親征錄も祕史に同ドければ、喇失惕の之に違へるは、修正祕史の誤りを承けたるには非ず、喇失惕の偶誤れるなり。又札八兒火者耶律阿海の傳に依れば、王罕の掩襲を避けて逃げ出でたる時、直ちに巴勒主納に至りて誓へるに似たり。これは時情には善く合へれども、曖昧なる單文孤證のことなれば、祕史親征錄の明文を打ち消すほどの力は無かるべし。)

合撒兒の逃げ還り

成吉思合罕は、その巴勒主納に水飲み居る時、合撒兒は、妻子を、也古(元史世系表淄川王也苦、太宗紀野苦、憲宗紀野古また耶虎、世祖紀也古、耶律留哥の傳也苦、王珣の傳也忽)、也松格(元史世系表移相哥大王、憲宗紀亦孫哥、世祖紀也先哥)、禿忽(親征錄元史太祖紀脫虎、世系表脫忽大王)なる三人の子を王罕の處に捨てて、僅に身にて、從者を伴れて出で

成吉思汗のたばかり

て、兄をとて成吉思合罕を尋ね、合喇溫只敦(親征錄哈剌渾只敦山、元史哈剌渾山)の嶺どもに緣りて、得る能はず、困窮〜て牛皮(失里)と筋(失兒不孫)とを喫ひて行きて、巴勒主納に成吉思合罕に合へり。合撒克に來らるゝと喜びて、成吉思合罕は、王罕に使を遣らんと謀りて、沼咧亦惕の合里兀荅兒(親征錄哈柳荅兒)兀唎罕の察忽兒罕(卷三の察兀兒罕、親征錄抄兒寒)二人もて言ひて遣るに「罕額赤格に合撒兒の言とて言へ」とて言はく「兄(合剌)を望みて、彼の影(合剌阿)を失へり。蹈みて彼の路(合亦)を得かれたり。叫びて、聲(合亦剌)を聽かれざりき。星(裕惕)を望みて、土(兀兒那)の枕にて臥(格卜帖)〜たり、我。我が妻子は、罕額赤格の處にあり。信賴

を望み得ば（明譯若差一箇可倚仗的人來呵）、罕額赤格の處に住かん、我」と言へ」と云ひて遣りぬ。又言はく「我等は、汝等に續き動きて、客魯嗹河の阿兒合勒苟吉に約〜合はん。汝等そこに來よ」と約〜合ひて、便ち合里兀荅兒、察忽兒罕二人を遣ると、主兒扯歹、阿兒孩二人を先驅として、巴勒主納納兀兒より成吉思合罕續き起ち合ひて、出で出馬〜たるまゝに客魯嗹河の阿兒合勒苟吉に到りぬ。

王罕金帳の筵會

合里兀荅兒、察忽兒罕二人、王罕の處に到りて、合撒兒の言とて、此處より言ひて遣りたる言を言ひき。王罕は、金の天幕を起〜て、不意にて筵會〜て居りき。（金の天幕は、蒙語阿勒壇帖兒篾。宋の彭大雅の黑韃事略に疏證にその製を述べて「即是草地中大氈帳。上下用氈爲衣、中間用柳編爲窗眼透明、用千餘條索拽住。闔與柱、皆以金裹、故名。中可容數百人」とあり。これは、元の太宗の時の製を述べたるなれども、王罕の金帳も、この類なるべし。）合里兀荅兒、察忽兒罕二人の言につき、王罕言はく「然あらば、合撒兒來よ」と云ひて、「賴るべき亦禿兒堅（前の亦都兒堅、親征錄亦禿兒干）を遣らん」とて遣り合ひき（回る二人と共に遣りき）。かくて來ると、約會の地に阿兒合勒苟吉に到れば、形影大なるを見て、亦禿兒堅なる使回り走りき。合里兀荅兒の馬は、速くありき。

亦禿兒堅の捕はれ

者者額兒山の戰

合里兀荅兒追驅けて、捕ふる心遂げず〜て、彼の前後を横ぎり行く時、察忽兒罕の馬は遲くありき。後より箭の到る先にて(箭の達する距離にて)、亦禿兒堅の金の鞍ある黑き騸馬の臀の根を坐るべく(尻をつくほどに)射たりき。そこに亦禿兒堅を合里兀荅兒察忽兒罕一二人捕へて、成吉思合罕の處に率て來ぬ。成吉思合罕は、亦禿兒堅に話〜合はず、「合撒兒の處に率て往け。合撒兒知れ」と云へり。率て往きたれば、合撒兒は、亦禿兒堅に話〜合はず、すぐ其處に斬りて棄てたり。

合里兀荅兒、察忽兒罕二人、成吉思合罕に申さく「王罕は、

合荅黑勇士の働き

不意にてあり(明譯不隄防)。金の天幕を起〜て筵會〜てあり。速く支度〜て、夜夜夜通〜行きて襲ひ圍まん」と云へり。この言を善〜と〜て、主兒扯歹阿兒孩二人を先驅せ〜めて、夜夜夜通〜到りて、者折額兒溫都兒(卷五の者者額兒溫都兒、親征錄徹徹兒運都山、元史折折運都山)の折兒合卜赤孩(折兒のはさま)の口に居るを圍みたり。三夜三日禦がれ、圍みて立ちたれば、第三の日窮迫〜て彼等降れり。王罕桑昆二人は、夜いかに出でたるをも知られざりき。この禦ぎ合ひたる者に、只兒斤の合荅黑巴阿禿兒(前の合荅黑)ありき。合荅黑巴阿禿兒降りて來て言はく「三夜三日禦ぎ合へるに、正主の君を見ると、拏へて

いかんぞ殺さゝめん」と云ひ、廢つる能はずゝて「命を助かり逃去れ」と云ひ、挑み鬪ひ禦ぎ合ひたり、我。余死なゝめられば、死なん。成吉思合罕に恩賜せられば、力を與へん」と云へり。成吉思合罕は、合荅黑巴阿禿兒の言を善ゝとゝて、勅あるに「正主の君を廢つる能はずゝて、「命を助かり逃去れ」と云ひ、禦ぎ合ひたる丈夫にて彼はあらずや。伴となるべき人なり」と云ひて、恩賜ゝて死なゝめず、忽亦勒荅兒の命(戰死)の故に、合荅黑巴阿禿兒を百人の只兒斤を忽亦勒荅兒の妻子に「與へ「彼等に」力を與へよ。男の子生れば、忽亦勒荅兒の子孫の子孫に至るまで

忽亦勒荅兒の遺族の賞賜

隨ひて力を與へよ。女の子生れば、その父母は己が意にて勿嫁がせそ。忽亦勒荅兒の妻子の前後に仕へよ」と恩賜ゝて勅ありき。忽亦勒荅兒薛禪の口を先開きたるが故に、成吉思合罕は恩賜ゝて勅あるに「忽亦勒荅兒の子孫の子孫に至るまで、忽亦勒荅兒の功の故に、遺族の賞賜を取り居よ」と勅ありき。(姚燧の牧庵文集に、平章忙兀公博羅驩の碑あり。本書の文と相證する所あるが故に、下に引かん。博羅驩は、忽亦勒荅兒の曾孫にして、世祖の朝の平章政事なり。「畏荅兒の傳の原據

而與兄畏翼俱事太祖時太疇盛强畏荅而苦止曰「帝何負汝而爲是竟去追之不復雪泣而歸請獨宣力帝貳之曰「汝兄與衆皆往獨留何爲」乃折矢誓曰「所不終事帝有如此矢」帝感其誠易名屑塵約爲按荅帝與王罕陳於曷剌眞彼衆我寡敕兀魯一軍先發其將朮徹帶玩鞭馬髮不應屑塵請曰「戰猶鑿也匪斧不入我先爲鑿」顧帝訣曰「臣萬一不還三黃頭兒將軫聖慮者」辰入疾戰大敗其軍哺猶逐北敕使止之乃旋師免冑爲殿腦中流矢帝親爲傅藥寢與同帳踰月而卒帝曰「畏只里吉爲敵將實禦屑塵其以只里吉民百戶屬屑塵子世世歲賜勿絕」其

族散亡者、收完之、即封北方萬家」元史畏荅兒の傳は、全くこの文を採り、只畏荅而を改めて畏荅兒とし、屑塵を薛禪とし、按荅を按達とし、曷剌眞を哈剌眞とし、朮徹帶を朮徹台とし、只里吉を只里吉實と誤れり。又太時は泰赤兀惕、兀魯は兀魯兀惕、曷剌眞は合剌合勒只惕、朮徹帶は主兒扯歹なり。只里吉は、即ち只兒斤なるを、誤りて敵將の名とせり。又この戰は、日暮に始まりて雲時に〜て決したるを、辰より晡に至るとせるは、非なり。合荅黑勇士を忙兀惕氏に賜はれる事につきて、李文田は「以其忠誠衛上、使忽亦勒荅兒家、得其死力也」と云へり。然るに元史は、この碑文に據り、只里吉の抗敵〜たるが爲に賜はれりと書けるに由り、高寶詮は、之を駁して「刺忽亦勒荅兒下馬者、初非只兒斤、且太祖方嘉合荅黑可以做伴、則其所以與忽亦勒荅兒家者、李說爲長。元史云云、淺矣」と云へるは、甚だ當れり。)

成吉思汗實錄卷の六終り。

塔孩勇士の恩賞

札合敢不の二女

成吉思汗實錄卷の七。

かく客咧亦惕の民を屈服せ〜めて、各分けて虜へさせたり。速勒都思の塔孩巴阿禿兒(卷三の塔孩)の功の故に、一百の只兒斤を與へたり。又成吉思合罕勅あり、王罕の弟札合敢不に二女の息女ありしその姉女亦巴合別乞を(卷八の末に二たび見ゆ。)成吉思合罕自ら取り、妹女莎兒合黑塔泥別乞を拖雷に與へたり。(元史本紀に、憲宗桓肅皇帝、諱は蒙哥、睿宗拖雷の長子なり。母を莊獻太后、怯烈氏、諱は唆魯禾帖尼と曰ふ。后妃表に、睿宗の唆魯和帖尼妃子、怯烈氏、追謚莊聖皇后、また顯懿莊聖皇后とあり。拖雷は、本傳に「睿宗景襄皇帝、諱は拖雷、太祖の第四子、太宗の母弟なり」とあり。)

その緣に依りて、札合敢不を彼に從ふ昵近の民も圓全第二の轅と爲れと云ひて、恩賜〜て虜へさせざり

巴歹乞失里黑の恩賞

き。

又成吉思合罕勅あるには「巴歹、乞失里黑二人の功の故に、王罕の金の天幕、鋪陳〜たる金の酒局の器皿を、取扱ふ人ごめに「與へん。」汪豁只惕客咧亦惕は、（汪豁只惕姓の客咧亦惕人。汪豁只惕は、汪豁眞の複稱なり。卷四の溫眞は、親征錄の嫩眞、別咧津の弘豁攸惕に〜て、弘豁攸惕は、卽ち汪豁只惕なれば、溫眞は、溫豁眞の中略又は缺脫なるべし。）彼等の番士と爲れ。箭筒を帶ば〜めて、喝盞せ〜めて（明譯飲酒時、又許他喝盞）、子孫の子孫に至るまで自在に快樂せ「〜め」ん。多き敵に奔らば財を得ば、得たるまゝに取れ。野の獸を殺さば、殺〜たるまゝに取れ」と勅ありき。（幹樂 幹勒札 幹魯阿速 幹魯克撒阿兒 阿刺阿速 阿刺黑撒阿兒 阿不惕）

喝盞の禮

（喝盞は、盞を乾かすと云ふ意にて、筵會の時に樂を奏〜て酒を進むるを云ふ。蒙語は 斡脫克 にて、明譯には進酒とも譯せり。輟耕錄卷の二十一に

天子凡宴饗、一人執酒觴、立於右階、一人執柏板、立於左階。執板者、抑揚其聲、贊曰、斡脫。執觴者、如其聲和之曰、打弼、則執板者、節一板。從而王侯卿相、合坐者坐、合立者立。於是衆樂皆作、然後進酒詣上前。上飲畢授觴、衆樂皆止、別奏曲、以飲陪位之官。謂之喝盞。蓋沿襲亡金舊禮、至今不廢。諸王大臣、非有賜命、不敢用焉。斡脫打弼、彼中方言。未暇考求其義。（斡脫は、卽ち斡脫克にて、打弼は、「宜し」なり。板を執れる者酒を進めよ」と云へば、觴を執れる者「宜し」と應ふるなり。酒を飲む時にこの禮を用ふることは、諸王大臣にても、合罕の特許を得たる者に非ざれば能はざり〜なり。）又成吉思合罕勅あるには「巴歹、乞失里黑二人の、「我が」命の閒に功を致せる故に、長生の上帝に祐護せられて、

客咧亦惕の民を屈服せ〜めて、高き位に到りたるぞ。この後我が子孫の子孫に、位に居て、かくの如く功を致せることを繼ぎ繼ぎに省みさせん」と勅ありき。客咧亦惕の民を虜へて、誰にも缺けざるまでに撒〜合へり。

客咧亦惕の民の分配

萬の禿別延（卷五の土綿禿別干。元史完澤の傳、土伯燕氏）を撒〜合ひて、引受けつゝ取り合へり。多き董合亦惕を整ふる日に到らず虜へさせたるぞ。血ある物（生きたる人）を剝ぎ要ふる只兒斤の勇士どもを開きて分けて、共に到る能はざら〜めたり。客咧亦惕の民をかく滅〜て、その冬は阿卜只阿闊迭格兒（征親錄）阿不札闊忒哥兒之山）に冬籠〜たり。

王罕、桑昆二人、身を以て反りて出でて去ると、的的克撒合勒の捏坤兀孫（捏坤の水・捏羣烏孫河）にて王罕喉乾きて入りたるに、乃蠻の斥候豁哩速別赤（親征錄）火里速八赤）の處に入りき。豁哩速別赤は、王罕を拏へけり。「我は、王罕なり」と云へども、認めず信ぜず〜て、そこに殺〜けり。桑昆は、的的克撒合勒の捏坤兀孫に入らず、外に去りて徹勒に入りて水求めたるに、（徹勒は、唐書の勅勒鐵勒の音に似たり。鐵勒の故地又は故地の一部に古名の殘れるなるべし。卷十二に徹勒の地に井を穿てる事あり、廣き地方の名に似たり。）野馬ども（蒙語忽剌惕、黄に薄青き馬）宣に刺されて立てるを、桑昆馬より下りて覷ひけり。桑昆の從者闊闊出と云ふ馬丁に妻ありて、桑昆と三

王罕の殺されし

闊闊出馬丁に桑昆の棄てられ

馬丁の妻の忠言

人にてありき。馬を闊闊出馬丁に執らしめけり。闊闊出馬丁、その騸馬を牽くと、回り走りき。その妻言く「金あ（阿勒塔塔）るを被る時、滋味あるを食ふ時、「桑昆は」我が闊闊出と云ふなりき。己が君を桑昆をいかんぞかく捨てて投りて去りたる、爾」と云ひて、その妻立ちて殘りけり。闊闊出言はく「桑昆を男にせんとてなるぞ、汝」と云ひき。その言につき、その妻言はく「婦の人は狗の面ありと云はるゝぞ、我。彼の金の盂をも與へ、水も汲みて飲ませよ」と云ひき。そこより闊闊出馬丁は、彼の金の盂を取るとて、後に向き棄てて走りき。かくて來ると、成吉思

君を乘てたる馬丁の誅せられ

合罕の處に闊闊出馬丁來て、「桑昆をかく徹勒に棄てて來ぬ、我」とて、そこに言ひ合へる言を都てをみな申して上ぐれば、成吉思合罕勅ありて、その妻を恩賞〳〵て、その闊闊出馬丁をば「正主の君をかく棄てて來ぬ。かゝる人今誰に伴とならば倚信すべけん」と云ひて斬りて棄てたり。

王罕の頭を乃蠻にての祭

乃蠻の塔陽罕（親征錄）太陽可汗（元史太祖紀太陽罕、蒙古源流達延汗）の母古兒別速（親征錄）菊兒八速（塔陽罕の妻）言はく「王罕は、前の老たる大なる罕なりき。彼の頭を持ち來よ。其ならば祭らん、我等」と云ひて、豁哩速別赤の處に使を遣りて、彼の頭を斷ち

て持ち來させて、認めて白き毛氈の上に置きて、媳婦ども に媳婦の禮を行はゝめて、喝盞せゝめて、樂器を彈かゝめて、盞を執りて祭りき。その頭かく祭らるゝ時笑ひけり。笑へりとて、塔陽罕は、碎くべく踐みけり。そこに可克薛兀撒卜喇黑言ひき。「死にたる王者（蒙語罕古溫、罕なる人）の頭を爾等又斷ちて持ち來て、次には爾等又碎きて、何の善き事か。我等の狗の吠ゆる聲惡ゝく爲れり。亦難察必勒格罕言ひき。「妻少く、夫なる我老いたり。この塔陽を祈禱に依りて生れさせけり。嗚呼、懦く生れたる我が子は、久後あまたの下等なる惡ゝき部衆を撫でて持

塔陽罕を譏る可克薛兀撒卜喇黑の慨言

ち能はんや」と云ひき。今狗の聲は、「禍の」近づける吠えを吠えたり。我等の合敦古兒別速の法度は銳く爲れり。我が罕懦き塔陽は弱くあり。爾は、鷹を使ふこと圍獵すること二つより外に心も技も無し」と云はれて、そこに塔陽罕言はく「この東に些の忙豁勒ありと云はれたり。彼の民は、老いたる大なる前の王罕を箭筒にて威ゝて反らゝめて死なゝめたり。今その罕と爲らんとゝてあり、彼等。天の上には日月二つ耀く光となれとて、日月二つは有るぞ。地の上に二つの合惕（罕の複稱）にはいかでか爲られん。我等往きて彼の忙豁勒を持ち來ん」と云ひ

塔陽罕の大言

天無二日地無二王

き。（明譯）天上止有一箇日月。地上如何有兩箇主人。如今咱去將那達達取了。日月二つを一箇と譯〜たるは違へり。修正祕史は、この言を注古惕部に言ひ遣りたる言に入れたりと見えて、親征錄には、使者の言として「日月在天、了然見之。世豈有二王哉」と譯〜、一つとも二つとも云はず、耀く光をば了然にてごまかせり。訶渥兒斯の重譯には「天に日二つ、一つの鞘に刀二つ、一つの目に眼二つ、一つの天下に二人の王あるべけんや」とあり。これは、修正祕史の原文に拘らず〜て增飾〜たるなり。洪鈞の重譯は、刀眼の譬を省き「我知天上惟一日一月、地下亦不容有兩王」と譯〜て、親征錄の文に近寄らせたり。元史の「天無二日、民豈有二王邪」と書けるは、祕史の文とは違へども、支那の古語にも合ひ、文意簡明に〜て、筆力雄健なり。）その時その母古兒別速言はく「いかにせんぞ、彼等を。忙豁勒の民は、氣息惡〜く、衣服黑暗なりき。（宋の黃震の古今紀要逸編に「韃靼之近漢者、曰熟韃靼、其遠於漢者、曰生韃靼。生韃靼有二、曰黑、曰白。皆事女眞。黑韃靼、至忒沒眞叛之、自稱成吉思皇帝」と云ひ、孟珙の蒙韃備錄に「韃靼始起之地、處契丹之西北。其種有三、曰黑、曰白、曰生。今成吉思皇帝及將相大臣、皆黑韃靼也」と云ひ、又彭大雅の黑韃事略に「黑韃之國、號大蒙古」と云へり。黑韃靼は、漢人の蒙古を呼べる名にして、之を黑と云へるは、蓋衣服の黑きに由れり。然れども黑韃事略に「其服右衽而方領、舊以氈毳革、新以紵絲金線、色用紅紫紺綠、紋以日月龍鳳、無貴賤等差」と云へば、黑衣の黑韃靼も、太宗の世に至りては、既に文彩を尙ぶ風俗となれり〜なり。）外に遠ざかりて居れ。彼等の清き媳婦ども息女どもを若くは取り來させて、彼等の手足を洗はせて、牛羊の乳を若くは擠ら〜めん、只」と云ひき。その時塔陽罕言はく「かくあらば、何か有らん。彼等忙豁勒の處に往きて、彼等の箭筒を必ず取り持ち來ん」と云ひき。

老將の諫を聽かざる塔陽罕の狂愚

この言につき、可克薛兀撒卜喇黑言はく「嗚呼、大なる言を言ふかな、爾等。嗚呼、懦き罕、宜〜からんや。祕密にせよ（明譯）你不可說大話。這話你再休說（你元惕渾）」と云ひき。可克薛兀撒卜喇黑に勸められ（諫め られ）てあるに、脫兒必塔失と云ふ使

を汪古惕の阿剌忽石的吉惕忽哩に言ひて遣るには「この東に些の忙豁勒ありと云はれたり。汝は右の手となれ。我はこゝより力を并せて彼の少〳〵の忙豁勒の箭筒を取らん」と云ひて遣りき。その言に、阿剌忽石的吉惕忽哩答へて言はく「右の手となること能はず、我」と云ひて遣りて、阿剌忽石的吉惕忽哩は、月忽難と云ふ使もて成吉思合罕に言ひて遣るには「乃蠻の塔陽罕は、爾の箭筒を取りに來ん。我に右の手となれと云ひて來ぬ。我は爲らず。今我爾に警告〳〵て遣りぬ。(明譯補足)若不隄防、來て箭筒を取られん、爾」と云ひて遣りき。(汪古惕の阿剌忽石的吉惕忽哩は、親征錄に王孤部主阿剌忽思、本傳に阿剌兀思剔吉忽里汪古部人とあり。白達達は、汪古惕の漢名にして、卽ち古今紀要蒙韃備錄の白韃靼なり。親征錄に曰く「乃蠻太陽可汗、遣使月忽難、謀於王孤部主阿剌忽思的乞火里曰、近聞東方有稱王者。日月在天、了然見之。世豈有二王哉。君能益吾右翼、奪其孤矢。」阿剌忽思、卽遣使朶兒必塔失、以是謀先告於上、後舉族來歸。我之與王孤部親好者、由此也。」乃蠻の使脫兒必塔失を汪古惕の使と誤り、汪古惕の使月忽難を乃蠻の使と誤れり。又元文類に、閻復の駙馬高唐王闊里吉思の碑あり。闊里吉思は、阿剌忽石の曾孫なり、その碑に曰く「己巳、金塹山爲界、以限南北。阿剌兀思惕吉忽里一軍拒其衝。太祖聖武皇帝起朔方、併吞諸部。有國西北、曰帶陽罕者、遣使卓忽難來、謂曰「天無二日、民無二王。汝能爲吾右臂、朔方不難定也。」阿剌兀思料太祖終成大事、決意歸之。卽遣麾下將禿里必荅思、齎酒六檻、送卓忽難於太祖、告以帶陽之謀。時朔方未有酒醴。太祖祭而後飲、舉爵者三。使還、酬以馬二千蹄、羊二千角。」この兀思の傳は、この碑文に本づきて、使の名をば略けり。)

駱駝が原の圍獵

正にその時成吉思合罕は、帖篾延客額兒(駱駝が原。親征錄元史)帖麥該川、(親征錄また帖木垓川)に圍獵〳〵て、禿勒勤扯兀惕を圍みて居る時、阿剌忽石的吉惕忽哩の遣りたる月忽難なる使この報を致〳〵來ぬ。こ

乃蠻征伐の評議

の報につき、圍獵の上にて便ち「いかにかせん、我等」と云ひ合へれば、多くの人言はく「我等の驅馬ども痩せたり。今何かせん、我等」と云ひ合ひき。その時斡惕赤斤那顏（卽帖木格斡惕赤斤）言はく「驅馬ども痩せたりとて、いかんぞ辭まれん。我が驅馬どもは肥えたり。かゝる言を聞きて、いかんぞ坐られん」と云へり。又別勒古台那顏言はく「生きて居る閒に家人箭筒を取られば、生きて何の詮か有らん。生れたる丈夫、死なば又箭筒弓と骸と一つに臥さば善からずや。乃蠻の民は、國大く民多く〜とて、大なる言を言ひたり。我等、この彼等の大なる言に倚り、出馬して往きて、彼等の箭筒を取らば、難きことあらんや。往（斡都）かば、彼等のあまたの馬羣は、止まりて殘らざらんや。彼等の宮室は、空になりて殘らざらんや。彼等のあまたの部衆は、高き處に遁れて上らざらんや。彼等にこのかゝる大なる言を言はゝめて、いかんぞ坐られん。出馬せん、便ち」と云へり。

斡兒訥兀山の半崖の駐營

別勒古台那顏の此の言を善〜と〜て、成吉思合罕は、圍獵を罷めて、阿卜只合闊帖格兒（前の阿卜只阿闊迭格兒）より動きて、合勒合河の斡兒訥兀山の半崖に下馬〜て、（半崖は、蒙語）客勒帖該合荅。（卷六の客勒帖該合勒都惕と義同ド。卽ち忽亦勒荅兒を葬りたる處なり。親征錄には哈勒合河建忒該山、元史には建忒該山とありて、斡兒訥兀なる山の

名を脱し、半の蒙語なる客勒帖該を山の名とせり。喇失惕も親征錄に同じ。この句に依りて考ふれば、成吉思汗の圍獵〜たる帖篾延客額兒も、冬篾〜たる阿卜只阿闊迭格兒も、溯りて王罕の不意打を食ひ〜者者額兒溫都兒も、みな今の車臣汗部の東南境にありて、王罕は、合剌合勒只惕の戰の後に、未だ土兀剌の黑林の舊庭に還らざり〜なり。洪鈞は「この哈勒合河は、必ず東方の哈勒哈河に非ず」と云へれども、祕史の下文に、客魯嗹河に泝り撒阿哩客額兒に到るとあれば、東方の地なること、何の疑ひかあらん。

千戸百戸牌子頭六扯兒賓の任命

數(人數)を數へ合ひて、千をそこに千とし(千人を以て千人組とし)、千戸の官人、百戸の官人、十戸の官人をそこに任〜たり。(元史兵志に「國初典兵之官、視兵數多寡、爲爵秩崇卑、長萬夫者爲萬戸、千夫者爲千戸、百夫者爲百戸」又「十人爲一牌、設牌頭」とあり。この牌頭は、後文にはみな牌子頭と云へり。然れば千戸の官人は、漢語にては只千戸と云ひ、百戸の官人は、百戸と云ひ、十戸の官人は、牌子頭と云へるなり。蒙韃備錄にも「韃人生長鞍馬間、起兵數十萬、略無文書、自元帥至千戸百戸牌子頭、傳令而行」とあり。)**扯兒賓(侍從の官)をもそこに任〜たり。朶歹扯兒必(卷三の多)、朶豁勒忽扯兒必(卷三の多豁勒忽徹兒必)、斡格列扯兒必(卷三の斡歌連徹兒必、又斡歌來徹兒必)、脫命扯兒必、**(親征錄脫脫欒闊兒必、脫の字一つ多し。元史木華黎の傳掇忽闌、哈八

番士の新設

親軍千夫の長なる阿兒孩合撒兒

兒禿の傳千戸脫倫、石抹也先の傳脫忽闌、闊里必、石抹孛迭兒の傳奪忽闌、闊里必、忠義傳に伯八の父脫倫、闊里必、晃合丹氏、明里也赤哥の子、別咧津は蒙格里克の子、脫命扯兒必と云へり。明里も蒙格里克も、晃豁壇の蒙力克額赤格なり。)**不察囉扯兒必、**(前には見えず。)**雪亦客禿扯兒必**(卷三の雪亦客禿徹兒必)、**この六人の扯兒賓をそこに任〜たり。千を千とし、百を百とし、十を十とし**(千人百人十人の組合を作り)**畢へて、八十の宿衛**(蒙語)**客卜帖兀勒**)**七十の侍衛**(蒙語)**土兒合兀惕**(明譯散班)**をそこに番士**(番直の士、蒙語)**客失克田**(明譯護衛、元史兵志)**怯薛歹**)**に選びて入らしむるに、千戸百戸の官人どもの子ども弟どもを次に白身の人の子ども弟どもを入らしむるに、技能あり身材好き者どもを選びて入らしめたり。そこに阿兒孩合撒兒に恩賜〜て、「勇士どもを選びて千夫とせよ。戰ふ**

侍衛の長なる斡歌列扯兒必

侍衛宿衛等の職掌

日には我が前に立ちて戰へ。多くの日は我が侍衛の番士となれ」と勅ありき。「七十の侍衛には、斡歌列扯兒必長となりて居れ。忽都思合勒濬（卷三なる忽都思にて忽必來の弟）と議り合ひて居れ」と云へり。

又成吉思合罕勅あるには「箭筒士（蒙語 豁兒赤、明譯 帶弓箭）的（元史兵志 火兒赤、塔察兒の傳火兒赤者、佩櫜鞬侍左右者也）侍衛番士（侍衛の番士なるべし）厨官（蒙語 巴兀兒赤、元史兵志親烹飪以奉上飲食者曰博爾赤）門者（蒙語 額兀顛赤）馬官（蒙語 阿黑塔赤）ども、晝は番直（蒙語 客失克）に入りて、日落つる前に宿衛に挪〜て、「馬官は」騸馬の處に出でて宿れ（明譯 帶弓箭的人幷散班護衛厨子把門人等、教日裏入班來、至日落時、將管的事物交付與宿衛的、出去宿者。若管馬的、守著馬）。宿衛は、夜室の周圍に臥すものには臥させて、門に立つものには輪直〜て立た〜めよ。箭筒士侍衛は、その翌朝我等湯を飲まば、宿衛に告げて、箭筒士侍衛厨官門者ども、只只その職分を行へ。その居處に居よ。「宿衛は」三夜三日番直する日を盡〜て、只又法に依り三夜宿り（下宿）合ひて、替り合ひて、夜宿衛〜て居れ。周圍に臥〜て宿れ」と勅ありき。かく千を千と〜畢へて、扯兒必を任〜て、八十の宿衛七十の侍衛を番士に入ら〜めて、阿兒孩合撒兒に勇士どもを選び（選ばしめ）て、合勒合河の斡

乃蠻征伐の首途

兒訥兀山の半崖より乃蠻の民の處に出馬〜たるに、

鼠の年（我が土御門天皇元久元年甲子、宋の嘉泰四年、金の泰和四年、西紀一二〇四年、成吉思汗四十三歳の時）、夏の首の月の第十六の日の紅き光に、纛を祭りて出馬〜たるに、客魯連河に泝り、者別忽必來（親征錄元史）虎必來哲別）二人を先鋒として行き、撒阿哩客額兒に到れば、康合兒罕山の頂に乃蠻の斥候そこにありき。（康合兒罕山は、露西亞の地圖に見ゆる布爾林達班嶺なるべし。康合兒罕と云ふ名は、今の地圖には見えざれども、その嶺の東なる古の撒阿哩客額兒の地を衰古魯台草地と云ひ、その嶺の西南を渾呼魯台戈壁と云ひ、衰古魯も渾呼魯も康合兒に近ければ、古は、その嶺又はその嶺の一部を康合兒罕と云ひ〜ならん。）

兩軍斥候の衝突

我等の斥候より、一匹の青馬に惡〜き鞍あるを、乃蠻の斥候に取られき。乃蠻の斥候は、その馬を取りて語り

朶歹扯兒必の疑兵の謀

合へらく「忙豁勒の騸馬瘦せたり」と云ひ合ひけり。我等の「軍」は、撒阿哩客額兒に到りて、そこに止まりて「いかにせん」と云ひ合へば、そこに朶歹扯兒必は、成吉思合罕に建言すらく「我等は但少くあり。少きが上に疲れて來ぬ。かくも止まりて騸馬どもを飽かせつゝ、この撒阿哩客額兒に廣がり下營〜て、命あるだけの人毎に（この間に「男の」と譯すべき語あり。文法上の關係確かならず。）五處に火を燒きて、火にて嚇さん。乃蠻の民は多〜と云はれたり。彼等の罕は家より出でざり〜弱き「人」と云はれたり。火にて惑はする閒に、我等の騸馬どもを飽か〜め、乃蠻の斥候

を逐ひて追逼りて、彼等の中軍に合はゝめ、その亂の裏に戰はば成らんか」と建言ゝたれば、この言を善ゝとゝて、成吉思合罕勅あるには「かく便ち火を燒かゝめよ」とて、軍士どもに號令を傳へたり。かくて撒阿哩客額兒に廣がり下營ゝて、命あるだけの人「毎に」五處に火を燒かゝめたり。夜乃蠻の斥候は、康合兒罕山の頂より夜あまたの火を見て、「忙豁勒を少ゝと云はざりゝか。星より多き火あり」と云ひ、塔陽罕に惡ゝき鞍ある青馬の小馬を送りて遣りて、「忙豁勒の軍士ども撒阿哩客額兒に滿つるまで下營ゝたり。晝の內に增ゝたらんか。星より多き火あり」と云ひて遣りき。

敵の鋭を避くる塔陽罕の協議

斥候のこの報に到られて、塔陽罕は、康孩山（親征錄）杭海山（元史太祖紀沆海山、世祖紀十四康里脫脫の傳杭海、今の杭愛山）の合池兒兀孫（合池兒の水、親征錄）哈只兒兀孫河）にありゝが、この報を致さるゝと、古出魯克罕（親征錄屈出律罕、抄思の傳曲書律）（屈出律可汗、又曲出律可汗、元史）なる子の處に告げて遣るには「忙豁勒の騸馬ども瘦せたり。星より多き火ありと云へり。忙豁勒多く有り。今我等合ひ畢へば、離るゝこと難くならんか（明譯）今若與他連兵、後必難解）。合ひ畢へば、その黑き目を瞬き（合剌）（音兒篤思）做さず、その腮を刺さるとも、黑き血出づとも、避くること無き（合勒塔里勒）剛なる忙豁勒に合はば、成らん（合堂斤）